

# NEWS LETTER

*Institute of Social Safety Science*

地域安全学会ニュースレター No. 128

—目次—

1. 第55回(2024年度)地域安全学会研究発表会(秋季)開催要領 1
2. 第55回(2024年度)地域安全学会研究発表会(秋季)一般論文募集 4
3. 2024年度電子ジャーナル査読論文の募集と投稿方法 10
4. 総会等報告 12
5. 第54回(2024年度)地域安全学会研究発表会(春季)開催報告 34
6. 2023年度研究運営委員会活動報告 40
7. 東日本大震災連続ワークショップ2024 in 浪江町 41
8. 第5回アジア都市防災会議(5ACUDR)若手助成採択者参加レポート  
(1) 森保 純子 (同志社大学大学院) 45  
(2) 加藤 春奈 (東北大学大学院) 47  
(3) 上田 啓瑚 (防災科学技術研究所) 50  
(4) 成田峻之輔 (東北大学大学院) 52  
(5) 藤本 慎也 (同志社大学大学院) 54
9. 寄稿  
オクターブとグラデーション  
高原 耕平 (国土技術政策総合研究所) 56



地域安全学会ニュースレター  
ISSS News Letter

No. 128

2024. 8

# 1. 第55回（2024年度）地域安全学会研究発表会（秋季）開催要領

第55回（2024年度）地域安全学会研究発表会（秋季）を「静岡県地震防災センター」において対面で実施することを基本とし、下記の要領で開催することを予定しております。（なお、今回も査読論文発表会、一般論文発表会共にハイブリッドでの開催は考えておりません）

地域の安全、安心、防災に関心のある多くの方々の参加により、活発な発表、討議、意見の交流が行われることを期待いたします。奮ってご参加下さい。

## (1) 研究発表会

■日時：令和6年11月16日（土）～11月17日（日）（予備日：11月15日（金））

■参加形態：対面を基本とし、感染症拡大により対面での実施が困難と判断した場合はオンライン開催とします（両者の併用は想定しておりません）

■場所：静岡県地震防災センター  
〒420-0042 静岡市葵区駒形通り 5-9-1  
TEL：054-251-7100  
<http://www.pref.shizuoka.jp/bousai/e-quakes/access/index.html>



□徒歩：県庁またはJR静岡駅より、徒歩約25分（約2キロメートル）

□バス利用：JR静岡駅下車、静鉄バス「静岡駅前7番乗り場」中部国道線「本通十丁目」下車徒歩3分、「静岡駅前11番乗り場」西部循環駒形回り線「駒形五丁目」で下車、徒歩2分

□車利用：東名静岡インターを降り、「インター通り」を北進、国道1号の交差点を右折、2つ目の信号「清閑町」交差点を左折し、「しあわせ通り」を左側

■スケジュール \*論文の採択本数により、予備日の使用及びスケジュールは多少変更することがあります。詳しくは10月号を参照下さい。

- |              |             |  |
|--------------|-------------|--|
| (1)11月16日（土） | 10:00～      | 受付開始（静岡県地震防災センター2F）<br>（ポスター発表登録、展示作業は11月17日(日)9:00開始） |
|              | 10:30～10:40 | 開会あいさつ   |
|              | 10:40～12:15 | 査読論文発表   |
|              | 12:15～13:30 | 昼休み  |
|              | 13:30～16:00 | 査読論文発表   |
|              | 19:00～      | 懇親会（論文奨励賞の審査結果を発表します）                                  |
| (2)11月17日（日） | 9:00～       | 受付開始（静岡県地震防災センター2F）<br>（ポスター発表登録、展示作業は9:00開始）          |
|              | 9:30～12:15  | 査読論文発表   |

12:15～14:30 昼休み & 一般論文発表（ポスターセッション）  
（コアタイム：13:00～14:30）

14:45～16:00 査読論文発表

■参加費：無料（ただしオンライン開催となった場合は、事前申し込みが必要。申し込み方法等については10月号あるいは学会HPをご参照ください。）

\*またオンライン開催の場合は、参加して頂くためには、Zoom等の会議に参加するためのパソコン、タブレット、スマホ等の機器と通信環境が必要となります。

### ■論文集・梗概集

- ・論文集・梗概集のファイルを事前にインターネット上で公開する予定です。（詳しくは10月号参照）
- ・査読論文筆頭著者には、論文集を1冊贈呈しております。
- ・論文集は会場にて1冊4千円で販売を致します。

## (2) 懇親会

■日時：令和6年11月16日（土）  
19：00～ 21：00

■場所：クーポール会館  
〒420-0852 静岡県静岡市葵区紺屋町2-2  
TEL：054-254-0251

□ JR 静岡駅北口より徒歩5分



■参加費：一般7,500円（予定）、学生3,500円  
（Google Formsでの事前申し込みが必要です。学会HP及びニュースレター10月号でご案内します。）

### (3) オンライン形式の場合の一般論文発表（ポスターセッション）の実施方法

- ・一般論文発表の参加申し込み、梗概集原稿の提出までは、これまでと同じ手続きになります。
- ・発表形式をオンラインに切り替える場合は、学会 HP 上及び10月号のニューズレターにてお知らせいたします。（そうでない場合は対面形式でのポスター発表のみとさせていただきます）
- ・発表用のポスターについては、事前に PDF ファイルでご提出頂き、大会前から公開させていただきます。
- ・また、発表者のうち、事前に優秀発表賞の審査への応募をして下さった方には、事前に発表用動画の作成・提出を必須とさせていただきます。発表動画は事前に公開させていただきます。
- ・発表動画は、5分以内（厳守）で所定の方法で学会宛に提出して頂きます。なお、詳しい仕様と提出方法等については、ニューズレター10月号や学会 HP 上に掲載するように致します。
- ・質疑応答については、チャット・ツールの Slack を使ってやり取りをして頂くこととなります。詳しい操作方法等については、ニューズレター10月号や学会 HP 上に掲載するように致します。
- ・コアタイム時間中は、発表者は Slack にて必ず質疑等に対応して頂きます。
- ・質疑への参加者は、予め事前公開されているポスター（PDF ファイル）と（動画がある場合は）当該動画を見た上で参加して下さい。

### (4) 懇親会の事前申し込みのお願い

- ・懇親会にご参加頂く方は、Google Forms での事前申し込みが必要となります。秋以降に学会 HP 及びニューズレター10月号でご案内致します。



## 2. 第 55 回（2024 年度）地域安全学会研究発表会（秋季）一般論文募集

### (1) 投稿要領

地域安全学会 秋季研究発表会実行委員会

会員各位におかれましては、お忙しい日々をお過ごしのことと存じます。

さて、第 55 回（2024 年度）地域安全学会研究発表会（秋季）を下記の通り開催いたします。本年も昨年に引き続き研究発表会全体を対面形式で行います。しかし、今後の新型コロナウイルス感染症の拡大状況によっては、オンライン方式のみの開催に変更する場合がありますので予めご承知おきください。なお、今回は査読論文発表会、一般論文発表会共にハイブリッドでの開催は考えておりません。なお、E-メールによる事前登録が必要です。また梗概集原稿は PDF ファイルに変換し、E-メールで投稿する形式になっております。このような状況下ではありますが、ふるってご応募くださいますようお願い申し上げます。

#### I. 開催日時・場所

##### (1) 日時：令和6年11月17日（日）（一般論文発表）

一般論文（ポスター）の発表は11月17日（日）（昼休み直後～午後の査読論文発表会開始までの時間帯）、コアタイム及び優秀発表賞審査は13：00～14：30の予定です。

また、11月17日（日）9：00～ポスターの展示が可能となります。

##### (2) 場所：静岡県地震防災センター

静岡市葵区駒形通 5-9-1（JR 静岡駅より徒歩 25 分）

##### \*開催方式がオンラインに変更になった場合

一般論文の質疑応答は11月17日（日）13：00～14：30（コアタイム）において、各発表者全員がチャット・ツールの Slack を使って同時並行で行います。詳しくは10月号を参照下さい。

①まず、発表者が発表内容をポスター形式で作成し、PDF ファイルにして事前に提出して頂きます。事務局が大会参加者にネットを通じて事前に当該ファイルを公開いたします。

②発表者のうち、梗概原稿提出時に、優秀発表賞の審査に応募された方は、事前の指定された期限までに発表動画（5分以内/厳守）を作成し所定の方法で学会宛に提出して頂きます。（詳細はニューズレター10月号参照）

③発表日のコアタイムの時間に、各発表者全員がチャット・ツールの Slack を使って同時並行で質疑応答を行って頂きます。

④Slack 等を使ったオンライン形式での質疑応答にはパソコン、タブレット、等の機器と通信環境が必要となります。

#### II. 梗概原稿の投稿方法

一般論文発表をして頂くには、Eメールによる登録を行っていただく必要があります。発表形式は、予定通り研究発表会自体が対面で実施された場合は対面形式でのポスター発表のみ、新型コロナウイルス感染症の再拡大等によりオンライン形式での発表会となった場合は、事前の資料提出・公開 + リアルタイムでのオンライン形式の質疑のみとなります。

##### II-1. Eメールによる登録

(1) 登録期限：令和6年9月13日（金）

(2) 宛先：ippan-aki@isss.info

(3) 登録内容、書式：

1行目 「地域安全学会一般論文登録」と入力してください。

2行目 論文題目

3行目 筆頭著者氏名

4行目 筆頭著者所属

5行目 筆頭著者連絡先住所（郵便番号も）

6行目 筆頭著者E-メールアドレス

7行目 筆頭著者電話番号

8行目 筆頭著者ファックス番号

9行目 連名著者がいない場合は論文概要（250字以内）、いる場合はその氏名、所属を1行に1名ずつ記入、改行後、論文概要（250字以内）

注）発表者がわかるように氏名に○をつけてください。

(4) その他：

(a) 登録時の論文概要を発表会プログラムと共に、次号のニューズレター10月号および学会ホームページに掲載する。

(b) 発表は一人一編のみ

(c) 登録完了後、事務局より受付番号の入った登録受理メールをお送りします。

##### II-2. 梗概集原稿の送付

(1) 送付期限：令和6年9月30日（月）

(2) 論文形式：

(a) 次ページに掲載してある投稿形式参照。なお、当学会のホームページ（[www.isss.info](http://www.isss.info)）に掲載のMS-Wordテンプレートをダウンロードの上、利用可能。

(b) A4版、4ページ以内。PDFファイルに変換したものを投稿してください。投稿されたPDFファイルを白黒出力し印刷します。

(3) 送付先

(a) E-mail: ippan-aki@isss.info

（PDFファイルをe-mailにて送付してください）

(4) 梗概原稿送付時のメールの書式：

1行目 「優秀発表賞に応募します」あるいは「優秀発表賞に応募しません」というどちらかを明記ください。

\*「優秀発表賞」については、本投稿要領の「V. 優秀発表賞の事前応募登録」をお読みください。

2行目 Eメールによる発表登録受理メールにて返信された受付番号

3行目 筆頭著者（＝優秀発表賞の応募登録者）の氏名

4行目 筆頭著者所属

### Ⅲ. 投稿料の納入

- (1) 投稿料：10,000円（梗概集原稿4ページ以内厳守）
- (2) 投稿料の納入方法
  - ① 期限：令和6年9月30日（月）までに②宛てに振り込んでください。
  - ② 振込先：  
銀行：りそな銀行 市ヶ谷支店（店番号725）  
口座名：一般社団法人地域安全学会 秋季研究発表会口座  
口座種別・番号：普通預金 1745849  
振込者名：筆頭著者氏名
  - ③ その他：振り込みの際には、登録受理メールにて返信された受付番号を筆頭著者氏名の前に入力してください。
  - ④ 注意：査読論文の登載料振り込み口座とは異なりますのでご注意ください。

### Ⅳ. 優秀発表賞の事前応募登録（地域安全学会 表彰委員会）

地域安全学会では、平成24年度から春季・秋季研究発表会での一般論文の研究発表（口頭発表・ポスター発表）を対象として優秀発表賞を設置し、表彰を行っています。来たる令和6年11月に実施される第55回（2024年度）地域安全学会研究発表会（秋季）一般論文については、下記要領で実施します。

事前に応募登録された方のみを対象に選考するものとし、受賞資格を下記のように設けていますのでご確認の上、必ず下記の方法にて応募登録をお願いします。大学院生をはじめとする若手会員の皆さんや新たに研究活動を始められた方々の活発な研究活動を奨励することを目的としております。奮って応募していただくようお願いいたします。

#### ■「優秀発表賞」応募登録の方法

- ・論文本文送付時に情報を記載する。詳しい方法については、「Ⅱ. 梗概原稿の投稿方法」の「Ⅱ-2. 梗概原稿の送付」の「(4) 梗概原稿送付時のメールの書式」を参照してください。

#### ■地域安全学会研究発表会（秋季）での実施要領

- ・授賞対象：  
「地域安全学会優秀発表賞」の授賞対象者は、地域安全学会 研究発表会（春季・秋季）での一般論文の研究発表（口頭発表・ポスター発表）の発表者であり、原則、研究実施または論文作成において指導を受ける立場にある40歳（当該年度4月1日時点）未満の者とする。ただし、実務者等は研究歴等を考慮し年齢規定を緩和することもある。再受賞は認めない。また、予定された発表者ではない代理発表者及び一般論文登録時に審査を希望しない旨登録した者は対象外とする。
- ・授賞件数：若干名（当日の選考結果発表会に出席できる者）
- ・選考方法：発表の内容、プレゼンテーション、質疑応答の総合評価
- ・選考結果：後日、学会HP、ニューズレター等で発表する。

## (2) 投稿規程

### 一般論文投稿規程

平成21年7月  
令和3年7月改定  
地域安全学会 研究発表会実行委員会

#### 1. 一般論文投稿分野

地域社会の安全問題、解決策についての横断的な幅広い分野の研究・技術・実務などを論ずるもの、あるいは具体的な提言に関するもの。

#### 2. 投稿者

論文の筆頭著者は、地域安全学会会員に限り、研究発表会において発表し、かつ討議に参加しなければならない。

#### 3. 投稿先

地域安全学会研究発表会実行委員会の宛先とする。

#### 4. 発表方法

一般論文の発表方法は「口頭発表」「ポスター発表」または「オンライン発表」による。筆頭著者（発表者）1人につき、1演題に限るものとする。

#### 5. 投稿手続き

5-1投稿期限：投稿期限は、地域安全学会研究発表会に先だって会告する。

5-2投稿原稿の内容：投稿原稿は、1編で完結したものとし、同一テーマのものとのシリーズ発表は受け付けない。また、秋の研究発表会については、同一会期内で開催される研究発表会で発表する査読論文とは異なるものとする。

5-3使用言語：投稿論文に使用可能な言語は、和文または英文でなければならない。

5-4提出原稿の様式：投稿者は、期日までに「地域安全学会梗概集」に登載するための「印刷用オリジナル原稿」を地域安全学会研究発表会実行委員会事務局まで提出しなければならない。提出原稿は、「一般論文投稿形式」によるものとし、図・表・写真を含め、PDFファイルで提出するものとする。

#### 6. 著作権

6-1 著者は掲載された論文等の「著作権」を本会に委託する。

6-2 著者が自らの用途のために自分の掲載論文等を使用することについて制限はない。なお、論文等をそのまま他の著作物に転載する場合にはその旨を明記する。

6-3 掲載された論文等の編集著作権、出版権は本会に帰属する。

6-4 第三者から本会に対して、論文等の翻訳、図表の転載の許諾要請があった場合、著者に通知し許諾を求める。ただし既に本会会員として所属せず、連絡不能な場合はこの限りでない。

6-5 著者は、本会または本会が許諾した者の利用に伴う変形については「同一性保持権」を行使しないものとする。

6-6 論文等の内容が第三者の著作権を侵害するなど、第三者に損害を与えた場合は著者がその責を負う。

6-7 論文等の著作権の使用に関して本会に対価の支払いがあった場合は、本会会計に繰り入れて、学会活動に有効に活用する。

### (3) 執筆要領と投稿形式

## 地域安全学会講演概要集の執筆要領と和文原稿作成例

### Guideline for Manuscript and Japanese Paper Sample of the Proceedings of Social Safety Science

地域 太郎<sup>1</sup>, ○安全 花子<sup>2</sup>  
Taro CHIKI<sup>1</sup> and Hanako ANZEN<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 地域安全大学 情報工学科

Department of Information Technology, Chiiki Anzen University

<sup>2</sup> 防災科学コンサルタント(株) 防災技術部

Department of Disaster Mitigation Engineering, Bousai Kagaku Consultants Co., Ltd.

The present file has been made as a print sample for the Proceedings of ISSS. The text of this file describes, in the camera-ready manuscript style, instructions for preparing manuscripts, thus allowing you to prepare your own manuscript just by replacing paragraphs of the present file with your own, by CUT & PASTE manipulations. Both left and right margins for your Abstract should be set 1 cm wider than those for the text of the article. The font used in the abstract is Times New Roman, 9pt, or equivalent. The length of the abstract should be within 7 lines.

**Key Words** : Times New Roman, italic, 9 point font, 3 to 6 words, one blank line below abstract, indent if key words exceed one line

#### 1. レイアウト

##### (1) マージン等

- ・ 上下 : 各 20mm, 左右 : 各 20mm
- ・ 二段組み本文の段組間隔は 8mm

##### (2) フォント等

- ・ 題目 : 和文はゴシック 14pt, 中央揃え, 左右各 30mm のマージン.  
英文は Times New Roman 12pt, 中央揃え, 左右各 30mm のマージン.
- ・ 著者名 : 和文は明朝 12pt, 中央揃え, 左右各 30mm のマージン.  
英文は Times New Roman 12pt, 中央揃え, 左右各 30mm のマージン.
- ・ 著者所属 : 和文は明朝 9pt, 左揃え 30mm のマージン.  
英文は Times New Roman 9pt, 左揃え 30mm のマージン.
- ・ アブストラクト : 英文 Times New Roman 9pt, 左揃え, 左右各 30mm のマージン.
- ・ キーワード : Times New Roman, italic, 9pt, 3-6 語, 2 行以内, 左右各 30mm のマージン.  
“Key Words” はボールドイタリック体.
- ・ 本文 : 明朝 9pt, 行替えの場合は 1 字下げ.  
一章の見出し : ゴシック 10pt, 左寄せ  
一節, 項の見出し : ゴシック 9pt, 左寄せ  
一図, 表, 写真のキャプション : ゴシック 9pt, 中央揃え
- ・ 補注, 参考文献の指示 : 明朝 9pt の右肩上付き 1/4 角を原則としますが, 各学問分野の慣例に従っても構いません.
- ・ 補注(必要な場合) : “補注” はゴシック 10pt, 左寄せ, 補注自体は, 明朝 8pt.
- ・ 参考文献 : “参考文献” はゴシック 10pt, 左寄せ. 参考文献自体は, 明朝 8pt.

##### (3) 行数および字数

二段組みとし, 一段当りの幅は 81mm, 1 行当り 25 字, 行間隔は 4.3mm で, 1 ページ当り 60 行を標準として下さい. したがって, 文章のみのページでは 1 ページ当り 3,000 字が標準的な字数となります.

##### (4) 総ページ数

題目から参考文献までを含めて, 最大 4 ページの偶数ページとして下さい.

#### 2. 英文論文への適用

本文を英文とする論文の執筆要領は, 本文が和文であることを前提として作成した本「執筆要領」に準拠して下さい. しかし, 英文の場合は, 和文のタイトル, 著者名, 所属は不要です.

本文のフォントは, Times New Roman 9pt を基本として使用して下さい.

#### 3. 印刷用オリジナル原稿

「地域安全学会講演概要集」は, 定められた期日までに, 印刷用オリジナル原稿を提出していただきます.

印刷用オリジナル原稿とは, 印刷・出版用の高度なタイプライターもしくはコンピューターシステムを用いて作成され, そのままオフセット印刷にかけられる完全な体裁に整えられた原稿を指します.

#### 4. 著作権と著者の責任

「地域安全学会講演概要集」に登載された個々の著作物の著作権は著者に属し, 原稿の内容については著者が責任を持つこととなります. したがって, 印刷後発見された誤植や内容の変更はできません. 誤植の訂正や内容の変更が必要な場合は, 著者の責任において, 文書で, 当該論文が登載されている「地域安全学会講演概要集」所有者に周知して下さい.



## (4) 地域安全学会研究発表会における「技術賞」の応募事前登録のお知らせ

地域安全学会 表彰委員会

地域安全学会では、平成20年度から、「地域社会における安全性および住民の防災意識の向上を目的として開発され、顕著な貢献をしたすぐれた技術（システム、手法、防災グッズ、情報技術、マネジメント技術を含む）」を対象として「技術賞」を創設し、表彰を行っています。平成25年度から、広く会員への周知を図るとともに、一般論文投稿時に筆頭著者から応募登録を受け付けることで審査対象を広げ、別途応募書類を作成する事なく一次選考対象に加えることにしています。

なお、この応募事前登録の有無にかかわらず、従来通り10月に改めて技術賞候補の推薦を公募した際に申請書類を提出していただいて、本応募をして頂くこととなります。審査会は、今年度のすべての応募を対象に年一回行われます。

同じく一般論文を対象とした「優秀発表賞」とは審査の視点や対象が異なるため、重複応募登録は妨げません。奮って応募していただくようお願いします。

■研究発表会(秋季)における「技術賞」応募事前登録の方法は以下の要領でお願いします。

論文本文送付時に、論文を送付したメールとは別便のメールで以下の情報を記載して下さい。

- (1) 登録期限：一般論文の梗概原稿送付期限と同じ
- (2) 宛先：一般論文の送付先メールアドレスと同じ： [ippan-aki@isss.info](mailto:ippan-aki@isss.info)
- (3) 応募登録内容、書式：
  - ・メールのタイトルを「2024年度秋季一般論文技術賞事前応募」としてください。
  - ・メール本文に以下の情報を記載する。
    - 1行目 「技術賞に応募します」と入力してください。
    - 2行目 Eメールによる発表登録受理メールにて返信された受付番号
    - 3行目 筆頭著者（＝技術賞の応募登録者）の氏名
    - 4行目 筆頭著者の所属
    - 5行目 筆頭著者のE-メールアドレス

■研究発表会(秋季)の査読論文、並びに電子ジャーナル論文投稿時における、著者からの「技術賞」応募登録制度はありませんが、学術委員会による推薦制度が設けられています。

## (5) 研究発表会（秋季）「優秀発表賞」事前応募登録のお知らせ

地域安全学会 表彰委員会

地域安全学会では、平成24年度から春季・秋季研究発表会での一般論文の研究発表（口頭発表・ポスター発表・オンライン口頭発表）を対象として優秀発表賞を設置し、表彰を行っています。来たる令和6年11月に実施される第55回（2024年度）地域安全学会研究発表会（秋季）一般論文（ポスター形式）については、下記要領で実施します。

事前に応募登録された方のみを対象に選考するものとし、受賞資格を下記のように設けていますのでご確認の上、必ず下記の方法にて応募登録をお願いします。大学院生をはじめとする若手会員の皆さんや新たに研究活動を始められた方々の活発な研究活動を奨励することを目的としております。奮って応募していただくようお願いいたします。なお、優秀発表賞に事前応募した方は、もし開催形式がオンライン形式に変更になった場合は、発表動画を事前に提出して頂くことが必須となりますので、ご注意ください。（その場合はニューズレター10月号、学会HP等で詳細をお知らせします） 選考結果は後日、学会HP、ニューズレター等で発表します。

### ■「優秀発表賞」応募登録の方法

- ・研究発表会実行委員会への論文本文送付時に、メール本文に以下の情報を記載する。
  - 1行目 「優秀発表賞に応募します」と入力してください
  - 2行目 Eメールによる発表登録受理メールにて返信された受付番号
  - 3行目 筆頭著者（＝優秀発表賞の応募登録者）の氏名
  - 4行目 筆頭著者の所属

\*論文本文送付時に情報を記載する方法については、本ニューズレター「2. 第55回（2024年度）地域安全学会研究発表会（秋季）一般論文募集」の「(1)投稿要領」の「II. 投稿方法」の「II-2. 梗概原稿の送付」の「(4)梗概原稿送付時のメールの書式」にも記載されています。

### ■地域安全学会研究発表会（秋季）での実施要領

- ・授賞対象：  
「地域安全学会優秀発表賞」の授賞対象者は、地域安全学会 研究発表会（春季・秋季）での一般論文の研究発表（口頭発表・ポスター発表）の発表者であり、原則、研究実施または論文作成において指導を受ける立場にある40歳（当該年度4月1日時点）未満の者とする。ただし、実務者等は研究歴等を考慮し年齢規定を緩和することもある。再受賞は認めない。また、予定された発表者ではない代理発表者及び一般論文登録時に審査を希望しない旨登録した者は対象外とする。
- ・授賞件数：若干名（当日の選考結果発表会に出席できる者）
- ・選考方法：口頭発表の内容、プレゼンテーション、質疑応答の総合評価
- ・選考結果：大会当日の懇親会で発表する

# 3. 地域安全学会論文集 No. 46(電子ジャーナル)の募集と投稿方法

2024年7月  
地域安全学会 学術委員会

地域安全学会では研究発表会(秋季)論文に加えて、電子ジャーナル論文の募集を実施しております。2024年度も「地域安全学会論文集 No. 46(電子ジャーナル)」を募集することになりました。本電子ジャーナル査読論文については、2024年8月9日(金)正午までの期間内に、地域安全学会のWebサイト(<http://iss.jp.net/>)から、論文申込と査読用論文原稿を同時に投稿して下さい。

査読は、カラー原稿を前提として行います。なお、再録、印刷される冊子体論文集はすべて白黒印刷とします。また、論文別刷りの作成・送付は行わないこととしておりますので、ご了承下さい。2020年の第47回研究発表会(秋季)査読論文(地域安全学会論文集 No. 37)より、**査読用論文原稿には氏名、所属および謝辞を記載することとなりました。投稿する際には、ホームページ上のテンプレートを必ずご使用下さい。**

会員各位の積極的な研究発表会査読論文の投稿をお願いします。

## 1. 日程等

- (1) 論文申込と査読用論文原稿の投稿期限(オンライン論文投稿・査読システム)  
2024年8月9日(金) 12:00(正午, 時間厳守)  
※本学会のオンライン論文投稿・査読システムでは、1度投稿すると修正できません。十分に確認の上で投稿ください。  
※また1投稿あたり1件の投稿料が必要です。同じ論文を複数回投稿することがないようにご注意ください。
- (2) 第一次審査結果の通知  
2024年11月下旬
- (3) 修正原稿の提出期限(オンライン論文投稿・査読システム)  
2025年1月3日(金) 12:00(正午, 時間厳守)
- (4) 第二次査読結果の通知  
2025年1月下旬
- (5) 再修正原稿の提出期限(オンライン論文投稿・査読システム)  
2025年2月14日(金) 正午12:00(時間厳守)
- (6) 「地域安全学会論文集 No. 46」への登載可否の通知  
2025年2月28日(金)頃
- (7) 登載決定後の最終原稿の提出期限(オンライン論文投稿・査読システム)  
① PDF ファイル と Word ファイル のオンライン上での提出  
2025年3月14日(金) 12:00(正午, 時間厳守)
- (8) 「地域安全学会論文集 No. 46」をホームページ上で電子ジャーナル論文として発行  
2025年3月21日(金)頃
- (9) 「地域安全学会論文集No. 46」を再録, 印刷(予定)  
2025年11月初旬~中旬※令和7年度地域安全学会研究発表会時。

## 2. 査読料の納入

- (1) 査読料 1万円/編  
①期 限: 2024年8月14日(水)までに、②宛てに振り込んで下さい。  
②振込先: 　りそな銀行 市ヶ谷支店  
　口 座 名: 一般社団法人地域安全学会 査読論文口座  
　口座種別: 普通口座  
　口座番号: 1745807  
　振込者名: 受付番号+筆頭著者名 (例: 2023-000 チイキタロウ)  
③その他: 査読料の入金確認をもって論文申込手続きの完了とさせていただきます。  
<投稿論文に形式上の不備があり、実際の査読が実施されない場合も返金いたしません>

## 3. 登載料の納入

- (1) 登載料 (CD-ROM 版論文集 1枚+冊子体論文集 1冊を含む)  
6ページは2万円/編, 10頁を限度とする偶数頁の増頁については、5千円/2頁。
- (2) 登載料の納入方法  
2025年3月20日(木)までに、上記2.(1)-②の振込先に振込んで下さい。

## 4. その他の注意事項

- (1) 執筆要領テンプレートの入手方法  
「論文集の執筆要領」は、電子ファイル「論文集の執筆要領と和文原稿作成例」(テンプレート)が、地域安全学会ホームページ (<http://iss.jp.net/>) にありますので、必ず最新のテンプレートをご利用下さい。なお、2020年の第47回研究発表会(秋季)査読論文(地域安全学会論文集No.37)より、査読用論文原稿には氏名、所属および謝辞を記載することとなりましたので、ご注意ください。  
詳細につきましては執筆要領をご参照下さい。
- (2) 申込だけで原稿が未提出のもの、査読料の払い込みのないもの、投稿論文が執筆要領に準じていないもの、および期限後の電子投稿は原則として受理できません。
- (3) オンライン論文投稿は1論文につき1度しかできません。締切までに修正を加えて再投稿をすることができませんので、必ず確認の上、完成原稿を投稿してください。
- (4) 投稿時には、ホームページにある「査読論文投稿チェックリスト」を確認した上で投稿してください。なおチェックリストの提出は必要ありません。
- (5) 「冊子体論文集」は、最終原稿ファイル(PDF形式)の白黒出力を掲載します。原稿がカラー版の場合でも白黒印刷となります。しかし、「冊子体論文集」に添付される「CD-ROM 版論文集」には、カラー図版に関する制限はありません。

### 会員の皆様へ 論文査読のご協力お願い

「地域安全学会論文集」への投稿論文につきましては、学術委員会にて論文1編あたり2名の査読者を、原則として会員内より選出し、査読依頼をe-mailで送信いたします。なお、2018年の第43回研究発表会(秋季)査読論文から、「オンライン論文投稿・査読システム」を使用して、査読業務(論文ダウンロードから査読結果の入力まで)を行っていただきますので、ご留意下さい。

地域安全学会の会員各位におかれましては、学術委員会より査読依頼が届きましたら、ご多用中のことと存じますが、ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

## 4. 総会等報告

### (1) 2024年度地域安全学会総会 報告

#### 地域安全学会 2024年度総会 議事次第

1. 日 時：2024年5月24日（金）17:15～18:45
2. 場 所：小千谷市総合産業会館 サンプラザ・大ホール（新潟県小千谷市城内1丁目8-25）
3. 議 題

- (1) 韓国災難情報学特別講演および地域安全学会との協定締結式

「Lessons and Directions in Facility Safety」

Lee Rae Chul（韓国災難情報学会前会長）

KimTaeHwan（韓国災難情報学会会長／龍仁大学校）

- (2) 年間優秀論文賞、技術賞、論文奨励賞 授与

- (3) 各賞表彰式

- (4) 表彰者講演 2023年度 技術賞

「リモートセンシング技術と保険データを用いた台風による建物損害額早期推計技術の開発」

三浦弘之（広島大学大学院先進理工系科学研究科）

村田雄亮（広島大学）

若狭弘幸（広島大学・あいおいニッセイ同和損保）

多嘉良朝恭（あいおいニッセイ同和損保）

- (5) 総会

議長選出

議事録署名人選出

- 1) 2023年度事業報告…………… 報告
- 2) 2023年度決算…………… 報告
- 3) 2024年度役員について…………… 審議
- 4) 2024年度事業計画…………… 審議
- 5) 2024年度予算…………… 審議

(定款による)

正会員数 597名（1/10以上で成立）

出席 50名

委任状 125名

合計 175名

## 1. 2023年度事業報告

### (1) 理事会の開催

2023年度は理事会を以下のとおり開催した。

- 第1回 2023年5月27日（土） 神奈川県横浜市（神奈川大学みなとみらいキャンパス）
- 第2回 2023年7月15日（土） オンライン
- 第3回 2023年9月2日（土） オンライン
- 第4回 2023年11月18日（土） 静岡県静岡市（静岡地震防災センター）
- 第5回 2024年1月6日（土） オンライン
- 第6回 2024年3月16日（土） 東京都中央区（同志社大学東京オフィス）

### (2) 春季研究発表大会の開催

2023年度春季研究発表大会を以下のとおり開催した。

日時：2023年5月27日（土）～28日（土）

会場：神奈川県横浜市（神奈川大学みなとみらいキャンパス）

#### ① 5月27日（土）

- (a) 関東大震災100周年記念一般公開シンポジウム「人々の関東大震災」  
司会 松岡昌志（東京工業大学教授）

学会長挨拶 村尾 修（地域安全学会会長）  
来賓挨拶 嶋崎和司（神奈川大学建築学部長）  
基調講演：「人々の関東大震災」  
鈴木 淳（東京大学教授）

パネルディスカッション

コーディネータ： 牧 紀男（京都大学教授）

パネリスト： 鈴木 淳（東京大学教授）

吉田律人（横浜市都市発展記念館）

田中 傑（都市史研究家）

目黒公郎（東京大学教授）

閉会挨拶 田中 聡（常葉大学教授）

- (b) 2023年度地域安全学会総会

2022年度各賞表彰式

（秋季研究発表会一般論文優秀発表賞／論文奨励賞／年間優秀論文賞）

- (c) 2022年度地域安全学会技術賞受賞記念講演

永松伸吾（関西大学教授）

- (d) 関東大震災特別セッション

- (e) 一般論文発表：85編

- (f) 懇親会

#### ② 5月28日（日）

視察バスツアー「横浜と東京でめぐる関東大震災」

### (3) 東日本大震災連続ワークショップ2023 in 陸前高田

以下の企画を実施した。

日時：2023年8月4日（金）～5日（土）

場所：陸前高田市文化会館 奇跡の一本松ホール（岩手県陸前高田市高田町館の沖）

#### ① 8月4日（金）

- (a) 講演会

「陸前高田市の復興と防災の取組について」

中村吉雄（陸前高田市役所 防災局防災課）



「東日本大震災後の自主住宅移転再建にみる住宅復興と地域再生の課題」

柄谷友香（名城大学教授）

(b) 研究発表会：12件

(c) 懇親会

② 8月5日（土）

現地見学会

(4) 秋季研究発表会の開催

2023年度秋季研究発表会を以下のとおり開催した。

期間：2023年11月18日（土）～11月19日（日）

場所：静岡県地震防災センター（静岡県静岡市葵区駒形通5丁目9-1）

査読論文発表：35件、一般論文発表：42件

(5) 地域安全学会論文集・梗概集の刊行

① 春季研究発表会において「地域安全学会梗概集No. 52」をホームページ上に公開した。

② 秋季研究発表会において「地域安全学会論文集No. 42（電子ジャーナル論文）、No. 43（研究発表会論文）」を刊行した。

③ 秋季研究発表会において「地域安全学会梗概集No. 53」をホームページ上に公開した。

④ 地域安全学会論文集No. 44（電子ジャーナル論文）をホームページ上に公開した。

(6) 一般研究論文等のホームページ公開

地域安全学会として学術的な知をより広く社会に還元することを目的として、これまでに発行してきた地域安全学会梗概集と東日本大震災特別論文集のHP上での公開を更新した。

(7) 地域安全学会論文賞・論文奨励賞・年間優秀論文賞の選出

①査読論文（電子ジャーナル）No. 42(2023. 3)、および査読論文（研究発表会）No. 43(2023. 11)に掲載された合計43編の論文を対象として、2023年地域安全学会論文賞の審査を行った結果、今年度は該当無しとなった。

②査読論文（研究発表会）No. 43(2023. 11)に掲載され、かつ受賞対象となった合計19編の論文を対象として、2023年論文奨励賞の審査を行い、以下の2編の筆頭著者を選出した。

・「時短型災害語り部学習プログラム「ツナミリアル」の効果検証に関する実験的研究」  
若木望（東北大学）

・「大阪府吹田市における不発弾処理対応における市職員の業務分析 ―市職員の業務分析を事例として―」

有吉恭子（吹田市役所）

③上記43編の査読論文を対象に年間優秀論文賞の審査を行い、以下の2編の論文の筆頭著者を選出した。

・「南海トラフ地震の想定被災地の市町村における官民災害時応援協定の比較分析」（地域安全学会論文集 No.42）

寅屋敷哲也（ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 人と防災未来センター）

・「被災自治体による発災から復興過程におよぶ災害対応記録誌の作成プロセス：「みやぎの 3.11」作成業務の観察・調査にもとづく実態把握」（地域安全学会論文集 No.43）

佐藤 翔輔（東北大学）

(8) 地域安全学会「技術賞」の選出

2023年度地域安全学会技術賞の募集に対し、1件の応募があり、審査委員8人による厳正な審査の結果、以下の1件に授賞することを決定した。

「リモートセンシング技術と保険データを用いた台風による建物損害額早期推計技術の開発」

三浦弘之（広島大学大学院先進理工系科学研究科）、村田雄亮（広島大学）、若狭弘幸（広島大学・あいおいニッセイ同和損保）、多嘉良朝恭（あいおいニッセイ同和損保）

(9) 地域安全学会「優秀発表賞」の選出

2023年度春季研究発表大会において47編の審査応募登録があり、また、研究発表会（秋季）においては13編の審査応募登録があった。審査の結果、以下の発表を行った7名を授賞対象者として選出した。

【春季】

- ・「三重県職員を対象とした防災人材育成指針策定の取組」  
岸江竜彦（三重県防災対策部）
- ・「二重過程理論にもとづく津波避難行動に関する証言の分析」  
新家杏奈（東北大学災害科学国際研究所）
- ・「非常参集後に基礎自治体職員が活用するアクションカードの作成手順の開発」  
藤原宏之（伊勢市役所）
- ・「放課後等デイサービス事業所における災害への備えに関する研究」  
前川良栄（一般社団法人福祉防災コミュニティ協会）
- ・「来訪者視点での震災伝承施設の特徴の布置：東日本大震災の65施設を対象とした試み」  
渡邊勇（東北大学大学院工学研究科）

【秋季】

- ・「災害救助法第2条第2項「おそれ適用」の検証—令和4年台風14号における初適用事例—」  
齋藤知宏（吹田市）
- ・「浸水対策助成制度の対象区域設定に関する実態と課題」  
山田拓実（東京大学大学院）

(10) ニュースレター発行とホームページ管理

2023年度はニュースレターNo. 123—No. 126の計4号を発行し、学会ホームページ上に掲載した。

(11) 会員メーリングリストによる情報提供

会員への迅速な情報発信を目指して、メールによる情報配信を行った。個人情報保護を考慮しつつ、効率的な会員サービスと会員管理を進めた。

(12) 企画研究小委員会研究活動

企画研究小委員会において以下の2テーマについて研究活動を実施した。

- ① DE&I防災研究小委員会（主査：小山真紀 岐阜大学）
- ② 社会に役立つ防災情報システム研究小委員会 第4期（主査：浦川豪 兵庫県立大学）

(13) 東日本大震災関連活動

「地域安全学会東日本大震災特別論文集No. 12」を刊行した。

(14) 2024年能登半島地震関連活動

2024年1月1日に発生した能登半島地震を受けて、以下の活動を行った。

- ① 能登半島地震特別委員会を設置した。
- ② 2024年2月8日に震災対策技術展（横浜）において「令和6年能登半島地震に関する報告会」を実施した。
  - ・ 司会：常葉大学 名誉教授 重川希志依

- ・ 令和6年能登半島地震（M7.6）に関する報告 ～道路交通インフラの被災の影響について～（筑波大学 システム情報系教授 庄司学）
  - ・ 令和6年能登半島地震（M7.6）に関する報告 ～人工衛星から観た2024年能登半島地震の被災地～（東京工業大学 環境・社会理工学院教授 松岡 昌志）
  - ・ 令和6年能登半島地震（M7.6）に関する報告 ～ライフラインの被害報告～（千葉大学大学院工学研究院教授 丸山喜久）
  - ・ 令和6年能登半島地震（M7.6）に関する報告 ～現場から見た行政広域支援について～（常葉大学大学院環境防災研究科教授 田中聡）
- ③ 能登半島地震特別委員会において、被災自治体の災害対応の状況を把握するために、被災地の応援から戻られた自治体職員を対象に「応援職員聞き取りプロジェクト」を立ち上げ、情報を蓄積した。

(15) 国際学術交流

- ・ 第5回アジア都市防災会議（The 5th ACUDR）開催に向けて準備をした。

(16) 地域安全学 夏の学校2023

「地域安全学 夏の学校2023 -基礎から学ぶ防災・減災-（安全・安心若手研究会）を以下のとおり開催した。

日時：2023年8月21日（月）

会場：北陸先端科学技術大学院大学・金沢駅前オフィス

参加者：現地参加33名、オンライン2名（合計35名）

①参加者間交流会

②講演

火災と防災計画の深い関係 越山健治（関西大学 教授）

個人の役割と人生経験の多様性と防災研究 小山真紀（岐阜大学 教授）

③参加者研究発表

(17) シンポジウム等の共催・参加

以下の催事に、地域安全学会として共催した。

- ・ 安全工学シンポジウム2023（日本学術会議）（2023年7月5日～7月7日）

(18) 防災学術連携体

防災学術連携体が主催・連携するシンポジウムに、下記の会員が参加し報告を行った。

①令和6年能登半島地震 三ヶ月報告会（2024年3月25日）

「石川県庁の能登半島地震対応へのアクション・リサーチ」菅野拓（大阪公立大学）

②日本学術会議公開シンポジウム 第18回防災学術連携シンポジウム、人口減少社会と防災減災、（2024年3月25日）

「人口減少社会における空き家と地域の建物倒壊リスク」村尾修（東北大学）

(19) 実務者企画委員会

行政実務者の関心の高いテーマを取り上げたオンライン勉強会を4回開催した。うち1回はぼうさいこくたいでのセッション開催。講師の了承が得られたものについては、勉強会の講演動画を地域安全学会実務者企画委員会YouTubeチャンネル

（<https://www.youtube.com/@issspapc>）にて公開し、実務者の防災関係研修受講機会の拡大を図っている。

(20) 会員数および年会費納入（2024年3月末）

	会員数	2023年度 会費納入状況
賛助会員	1	1
正会員	597	579
学生会員	117	108

(21) その他

## 2. 2023年度決算

決算に関して、糸井川監事、大西監事による監査を受けた。指摘された修正を取り入れた以下の決算報告に対して承認をいただいた。

一般社団法人 地域安全学会  
2024年3月31日現在

### 【貸借対照表】

(単位：円)

資産の部		負債及び正味財産の部	
科目	金額	科目	金額
現金	59,492	未払金	368,866
普通預金 (うち、国際交流事業用資金)	10,216,015 847,976	預り金	7,304
【口座別内訳】 ゆうちょ銀行	330,973	前受金	44,200
振替預金	44,548	仮受金	0
春季研究発表	732,769	未払法人税等	70,000
秋季研究発表	918,740		
りそな査読論文	7,266,589		
りそなワークショップ	866,827		
りそなリスコム事業	55,569		
前払費用	0		
商品	1,720,767		
未収会費	144,000		
未収入金	0		
仮払金	0		
ソフトウェア	0	負債合計	490,370
		その他一般正味財産	11,649,904
		正味財産合計	11,649,904
資産合計	12,140,274	負債・正味財産合計	12,140,274

## 【損益計算書】

(単位：円)

科 目	金 額
<b>【Ⅰ 収入】</b>	
1 会費収入	4,404,000
2 寄付金収入	0
3 受取助成金	100,000
4 事業収入	
ア 梗概集登載料	1,270,000
イ 梗概集販売料	18,260
ウ 論文集登載料	1,840,000
エ 論文集査読料	780,000
オ 論文集販売料	72,630
カ DVD販売料	0
5 雑収入	
ア 懇親会費	0
イ 視察費	232,000
ウ その他	320,059
6 受取利息	84
収入合計	9,037,033
<b>【Ⅱ 支出】</b>	
1 人件費	168,180
2 通信・広報費	239,848
3 印刷・編集費	1,248,775
(印刷編集費棚卸対応分)	-75,799
4 会議費	198,846
5 旅費交通費	946,692
6 交際費	153,520
7 委託費	993,744
8 消耗品費	39,728
9 事務用品費	5,109
10 減価償却費	0
11 支払手数料	15,070
12 謝金	220,000
13 補助金	40,000
14 事務局費	1,728,000
15 租税公課	9
16 運営費	1,112,509
17 雑費等	1,462,659
支出合計	8,496,890
税引前当期利益	540,143
法人税等	70,000
当期利益	470,143
前期繰越利益金額	11,179,761
次期繰越利益金額	11,649,904



## 2023年度地域安全学会収支報告書

(2023年4月1日～2024年3月31日)

収入の部

(単位：円)

科 目	2023年予算	2023年決算	比較 ①-②	備 考
1.会費収入	4,200,000	4,288,000	▲ 88,000	正会員:7,000円×570名 (うち1名前期分) 学生会員:2,000円×85名 賛助会員100,000円×1社 過年度の未収入分のうち当期入金分:28,000 (予算 正:550 学生:80 賛助:1)
2.寄付金収入	0		0	
3.受取助成金等	100,000	100,000	0	春季大会開催助成金
小 計	4,300,000	4,388,000	▲ 88,000	
4.春季研究発表会				
1)事業収益				
ア 梗概集登載料	750,000	740,000	10,000	登載料 10,000×65名、5,000×18名
イ 梗概集販売料	2,000	1,130	870	CD-R：1,000円×1枚+送料
2)雑収入				
ア 懇親会費	0	0	0	
イ 視察費	180,000	160,000	20,000	5,000円×32名
ウ その他	0	23,100	▲ 23,100	メダル作成費
小 計	932,000	924,230	7,770	
5.秋季研究発表会				
1)事業収益				
ア 梗概集登載料	400,000	400,000	0	登載料 (ペーｼﾞ数対応5,000円/2ペーｼﾞ) ×40名
イ 梗概集販売料	1,000	1,130	▲ 130	CD-R：1,000円×1枚+送料
2)雑収入				
ウ その他	0	0	0	
小 計	401,000	401,130	▲ 130	
6.東日本大震災連続ワークショップ				
1)事業収益				
ア 論文集登載料	175,000	130,000	45,000	登載料 10,000円×10名、15,000×2名
イ 論文集販売料	40,000	16,000	24,000	1冊：2,000円×8部
2)雑収入				
ウ その他	0	72,000	▲ 72,000	見学会：4,000円×17名+2,000円×2名
小 計	215,000	218,000	▲ 3,000	
7.学術				
1)事業収益				
ウ 論文集登載料	1,400,000	1,840,000	▲ 440,000	登載料 (2万円+5,000円/2ページ) ×59名
エ 論文集査読料	750,000	780,000	▲ 30,000	査読料：1編10,000円×78名
オ 論文集販売料	80,000	72,630	7,370	1冊：4,000円×18部
カ DVD販売料	20,000	0	20,000	1枚：2万円(会員価格)×1枚
2)雑収入				
ア その他	150,000	275,000	▲ 125,000	オンライン投稿査読システム利用料 5,000円×55編 日本災害情報学会 日本災害復興学会より
小 計	2,400,000	2,967,630	▲ 567,630	
8.受取利息	83	84	▲ 1	
9.その他	0	0		
収入合計	8,248,083	8,899,074	▲ 650,991	

支出の部

(単位：円)

科目	①予算	②決算	比較 ①-②	備 考
<b>1.事務局・総務</b>				
1) 人件費 (アルバイト給料)	0	9,000	▲ 9,000	書籍発送作業
2) 通信費・広報費	150,000	131,838	18,162	切手、送料、電話代等
3) 印刷編集費	30,000	22,000	8,000	コピー代、封筒印刷代
5) 旅費交通費	150,000	178,462	▲ 28,462	大会等事務局交通費、宿泊費
6) 交際費	5,000	0	5,000	
7) 委託費	330,000	330,000	0	会計事務所月25,000円＋税 5年4月-6年3月、メールアドレス運用代
8) 消耗品費	10,000	17,118	▲ 7,118	消耗品、10万円以下の備品
9) 事務用品費	5,000	3,300	1,700	事務用文具等
11) 支払手数料	80,000	6,160	73,840	銀行振込手数料、役員登記手数料
14) 事務局費	1,728,000	1,728,000	0	委託費月144,000円×12 5年4月～6年3月
15) 租税公課	20,000	9	19,991	源泉所得税、利子税、登録免許税、収入印紙代等
16) 運営費	50,000	47,220	2,780	メグル氏名等刻印費
17) 雑費等	5,000	0	5,000	
99) 予備費	70,000	70,000	0	前期の法人税等
小 計	2,633,000	2,543,107	89,893	
<b>2.広報</b>				
7) 委託費	160,000	24,200	135,800	サーバ利用料・保守費用
11) 支払手数料	1,000	165	835	銀行振込手数料
小 計	161,000	24,365	136,635	
<b>3.総会・理事会</b>				
1) 人件費				
ア アルバイト給料	0	0	0	
2) 通信費・広報費	50,000	52,800	▲ 2,800	Dropbox利用料等
3) 印刷編集費	30,000	0	30,000	案内送付用封筒・ハガキ・案内資料印刷
4) 会議費	50,000	29,360	20,640	理事会 会場費
5) 旅費交通費	200,000	270,524	▲ 70,524	理事会 旅費交通費
11) 支払手数料	5,000	1,815	3,185	銀行振込手数料
12) 謝金	0	0	0	
小 計	335,000	354,499	▲ 19,499	
<b>4.学術</b>				
1) 人件費 (アルバイト給料)				
ア アルバイト給料	100,000	57,000	43,000	論文データ等アップデート作業代
2) 通信費・広報費	80,000	36,830	43,170	論文発送料
3) 印刷編集費	1,000,000	867,075	132,925	論文集No.42, 43 印刷料、コピー代
4) 会議費	30,000	0	30,000	学術委員会昼食代、飲食代
7) 委託費	650,000	639,544	10,456	研究発表会論文オンライン査読システム委託費 年間基本利用料：560,828
11) 支払手数料	10,000	825	9,175	銀行振込手数料
16) 運営費	60,000	45,849	14,151	査読者昼食代
小 計	1,930,000	1,647,123	282,877	
<b>5.国際交流</b>				
11) 支払手数料	10,000	0	10,000	
13) 補助等	0	0	0	
16) 運営費	100,000	0	100,000	
小 計	110,000	0	110,000	

科目	①予算	②決算	比較 ①-②	備 考
6.春季研究発表会				
1) 人件費 (アルバイト給料)	100,000	60,600	39,400	
2) 通信費・広報費	10,000	0	10,000	郵送料
3) 印刷編集費	120,000	163,900	▲ 43,900	梗概集No.52 PDF+CD10部
4) 会議費	10,000	0	10,000	会場代
5) 旅費交通費	200,000	166,586	33,414	現地見学会等バス代、パネリスト交通費
6) 交際費	0	63,350	▲ 63,350	懇親会費用
8) 消耗品費	20,000	12,975	7,025	賞状用紙他
11) 支払手数料	3,000	1,485	1,515	銀行振込手数料
12) 謝金	200,000	60,000	140,000	パフォーマー、パネリスト
16) 運営費	400,000	591,453	▲ 191,453	運営機材利用料、看板代、現地見学会費用 (昼食代含む)
17) 雑費等	0		0	
小 計	1,063,000	1,120,349	▲ 57,349	
7.秋季研究発表会				
1) 人件費 (アルバイト給料)	80,000	41,580	38,420	
2) 通信費・広報費	20,000	16,730	3,270	梗概集送料、賞状送付料
3) 印刷編集費	65,000	72,600	▲ 7,600	梗概集No.53
4) 会議費	0	0	0	
5) 旅費交通費	5,000	2,280	2,720	アルバイト交通費
6) 交際費		74,640	▲ 74,640	懇親会会場代、料理代
8) 消耗品費	10,000	11,444	▲ 1,444	賞状、賞状用筒、備品
11) 支払手数料	1,000	1,045	▲ 45	
12) 謝金	30,000	30,000	0	パフォーマー謝金
16) 運営費	600,000	489,637	110,363	昼食、飲み物代、パネル設置代
小 計	811,000	739,956	71,044	
8.東日本大震災連続ワークショップ				
2) 通信費・広報費	5,000	1,650	3,350	
3) 印刷編集費	120,000	123,200	▲ 3,200	特別論文集No.12(CD付)
5) 旅費交通費	100,000	82,500	17,500	現地見学会等バス代
6) 交際費	0	15,530	▲ 15,530	懇親会会場代、料理代
11) 支払手数料	1,000	495	505	銀行振込手数料
12) 謝金	0	0	0	
16) 運営費	125,000	38,350	86,650	見学会費用 (昼食費含む)
小 計	351,000	261,725	89,275	
9.実務者企画委員会*				
4) 会議費	100,000	128,986	▲ 28,986	Zoom 機材レンタル
5) 旅費交通費	180,000	246,340	▲ 66,340	視察交通費・宿泊費
11) 支払手数料	2,000	2,750	▲ 750	
12) 謝金	20,000	30,000	▲ 10,000	
16) 運営費	200,000	0	200,000	
小 計	502,000	408,076	93,924	
10.その他事業				
2) 通信費・広報費	50,000	0	50,000	
4) 会議費	50,000	40,500	9,500	会場代 (社会に役立つ防災情報システム研究小委員会)
5) 旅費交通費	100,000	0	100,000	
8) 消耗品費	0	0	0	
11) 支払手数料	1,000	330	670	銀行振込手数料
13) 補助等	55,000	40,000	15,000	安全工学シンポジウム共催分担金、防災学術連携体会費
16) 運営費	100,000		100,000	安全・安心若手研究会の運営費:100,000円 (交通費も含む)
小 計	356,000	80,830	275,170	
支出合計	8,252,000	7,180,030	1,071,970	

収入-支出 (当期収支)	1,719,044
--------------	-----------



### 3. 2024年度役員について

理事、監事は2023～2024年度の2年の任期となるので、2023年度は役員改選を行わなかった。ただし、池田浩敬理事が理事退任の意向を示したため、新たに郷右近英臣氏を理事の候補者として加えることとした。2024年度役員は以下の通りである。

#### 1) 理事

生田英輔	大阪公立大学都市科学・防災研究センター
池内淳子	摂南大学理工学部
市古太郎	東京都立大学大学院都市環境科学研究科
稲垣景子	横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院
梅本通孝	筑波大学システム情報系
大原美保	東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター
加藤孝明	東京大学生産技術研究所
柄谷友香	名城大学都市情報学部
郷右近英臣	北陸先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科
越村俊一	東北大学災害科学国際研究所
越山健治	関西大学社会安全学部
小林秀行	明治大学情報コミュニケーション学部
小山真紀	岐阜大学流域圏科学研究センター
指田朝久	東京海上ディーアール株式会社
佐藤翔輔	東北大学災害科学国際研究所
庄司学	筑波大学システム情報系
立木茂雄	同志社大学社会学部
田中聡	常葉大学大学院環境防災研究科
西川智	東北大学災害科学国際研究所
秦康範	日本大学危機管理学部
藤本一雄	千葉科学大学危機管理学部
牧紀男	京都大学防災研究所
松川杏寧	兵庫県立大学減災復興政策研究科
丸山喜久	千葉大学大学院工学研究院
三浦弘之	広島大学大学院先進理工系科学研究科
南沢修	長野県松本地域振興局
村尾修	東北大学災害科学国際研究所
目黒公郎	東京大学生産技術研究所
森伸一郎	愛媛大学大学院理工学研究科
八木宏晃	静岡県危機管理部

#### 2) 監事

糸井川栄一	筑波大学名誉教授
大西一嘉	神戸大学大学院工学研究科

以上、理事30名、監事2名

## 2024年度地域安全学会委員会等の構成（案）

（◎委員長、○副委員長、□幹事、\_\_\_理事、理事は所属を省略）

### 【会長】

田中聡

### 【副会長】

小山真紀：総務（会員・広報）担当

大原美保：学術（研究・国際交流）担当

### 【総会・春季研究発表会実行委員会】

◎梅本通孝、○市古太郎、越村俊一、三浦弘之

### 【秋季研究発表会実行委員会】

◎八木宏晃、○郷右近英臣、湯瀬裕昭（静岡県立大学）、林里美（静岡県清水港管理局）

### 【学術委員会】

◎丸山喜久、○小林秀行、池内淳子、松川杏寧、宇田川真之（防災科学技術研究所）、竹谷修一（国土技術政策総合研究所）、中嶋唯貴（北海道大学）、望月智也（ERS）、奥村与志弘（関西大学）、諫川輝之（東京都市大学）、田中貴宏（広島大学）、田村圭子（新潟大学）、平山修久（名古屋大学）、荒木裕子（京都府立大学）

### 【研究運営委員会】

◎大原美保、○梅本通孝

### 【広報委員会】

◎藤本一雄、○秦康範、○庄司学、三浦弘之

### 【表彰委員会】

◎柄谷友香、○稲垣景子、村尾修

### 【選挙管理委員会】

◎指田朝久、○藤本一雄

### 【国際交流委員会】

◎西川智、○牧紀男、森伸一郎、立木茂雄、松川杏寧、目黒公郎、越山健治、村尾修

### 【東日本大震災特別委員会】

◎生田英輔、○佐藤翔輔、村尾修、杉安和也（岩手県立大学）、寅屋敷哲也（早稲田大学）、松川杏寧

### 【能登半島地震特別委員会】

◎田中聡、○小山真紀、□越山健治、□柄谷友香、□佐藤翔輔、藤生慎（金沢大学）、森崎裕磨（金沢大学）、村尾修、郷右近英臣、大原美保、牧紀男、南沢修、松川杏寧、目黒公郎、稲垣景子、池内淳子、杉安和也（岩手県立大学）

### 【実務者企画委員会】

◎南沢修、○秦康範、○八木宏晃、□阪本真由美（兵庫県立大学）、□古橋勝也（京都府）、小山真紀、小松剛（伊那市）、斉藤健郎（長野県）、岩垣津信太郎（岐阜県）、四井早紀（東京大学）、



岡田恵実（豊橋市）、竹順哉（気象庁）、有吉恭子（吹田市）、吉村裕司（龍谷大学）

【出版企画委員会】

◎立木茂雄、池内淳子、石川永子（横浜市立大学）、大西一嘉（神戸大学）、加藤孝明、小山真紀、阪本真由美、重川希志依（常葉大学）、菅野拓（大阪公立大学）、高田洋介（日本赤十字広島看護大学）、松川杏寧、山崎栄一（関西大学）

【安全工学シンポジウム担当】

◎加藤孝明

【防災学術連携体担当】

◎田中聡、○西川智

【安全・安心若手研究会】

◎松川杏寧、佐藤翔輔、杉安和也、藤生慎（金沢大学）、河本尋子（常葉大学）、寅屋敷哲也、畠山久（東京工業大学）、倉田和巳（名古屋大学）、郷右近英臣、落合努

## 4. 2024年度事業計画

### （1）理事会の開催

2024年度は理事会を下記のとおり開催する。

- 第1回 2024年5月24日（金） 新潟県小千谷市総合産業会館サンプラザ
- 第2回 2024年7月27日（土） オンライン（14:00-）
- 第3回 2024年9月14日（土） オンライン（14:00-）
- 第4回 2024年11月16日（土） 静岡（静岡地震防災センター）
- 第5回 2025年1月11日（土） オンライン（14:00-）
- 第6回 2025年3月22日（土） 東京（同志社大学東京オフィス）（15:00-）

### （2）総会の開催

総会を下記のとおり開催する。

- 日時：2024年5月24日（金）17:30-
- 場所：新潟県小千谷市総合産業会館サンプラザ

### （3）春季研究発表会・公開シンポジウムの開催

春季研究発表会・公開シンポジウムを下記のとおり開催する。

- 日時：2024年5月24日（金）～25日（土）
- 場所：新潟県小千谷市総合産業会館サンプラザ

### （4）東日本大震災連続ワークショップ2023 in 浪江町の開催

- 日時：2024年8月9日（金）～10日（土）
- 場所：浪江町地域スポーツセンター（福島県双葉郡浪江町権現堂下馬洗田5-2）
- ・浪江町の関係者による復興状況の講演、学会員による講演、研究発表会
- ・現地見学会

### （5）秋季研究発表会の開催

秋季研究発表会を下記のとおり開催する

- 日時：2024年11月16日（土）～11月17日（日）（予備日11月15日）
- 場所：静岡地震防災センター

(6) 地域安全学会論文集・梗概集の刊行

- ① 春季研究発表会において「地域安全学会梗概集 No. 54」、秋季研究発表会において「地域安全学会梗概集 No. 55」を刊行し、優秀発表賞を選出する。
- ② 地域安全学会論文集の論文募集は年2回とし、今年度は地域安全学会論文集 No. 45、同 No. 46（電子ジャーナル論文）の論文を募集する。
- ③ 秋季研究発表会において「地域安全学会論文集 No. 44、No. 45」を刊行し、地域安全学会論文奨励賞を選出する。
- ④ 地域安全学会論文集 No. 46（電子ジャーナル論文）をホームページ上で公開する。
- ⑤ 地域安全学会論文集（No. 44、No. 45）を対象に地域安全学会論文賞および年間優秀論文賞を選出する。

(7) 広報活動の強化と会員管理

サービスの向上を目指して、会員へのメールによる各種情報配信、ホームページによる情報提供、印刷物による情報発信について、各々の機能分化した情報提供を実施する。

(8) 地域安全学会技術賞の選出

表彰委員会において地域安全学会技術賞の選考を行う。

(9) 企画研究小委員会活動

企画研究小委員会において以下のテーマについて研究活動を実施する。

- ① 大規模災害における多数遺体の処置、遺体管理に関する研究（主査：山形真紀 立教大学）

(10) 国際学術交流

以下のとおり、国際学術交流を実施する。

- ① 第5回アジア都市防災会議（The 5th ACUDR）
  - 主催：台湾災害管理学会との共催
  - 会期：2024年4月26日～28日
  - プログラム：
    - 4月26日（金）：基調講演/研究発表会/協定締結式/懇親会（会場：International Conference Hall, Dapinglin United Development Building, Taipei）
    - 4月27日（土）～28日（日）：ツアー（九二一地震教育園區/集集鎮/車籠埔断層保存園區/台湾消防署訓練センター/台中国立歌劇院など）
- ② 第5回アジア都市防災会議における若手研究者の国際交流を活性化するために「若手研究者渡航旅費助成」を行う。
- ③ 台湾災害管理学会との協定締結（4月26日、International Conference Hall, Dapinglin United Development Building, Taipei）
- ④ 韓国災難情報学会との協定締結（5月24日、新潟県小千谷市総合産業会館サンプラザ）
- ⑤ 2025年第6回アジア都市防災会議（The 6 ACUDR）開催（またはその準備）

(11) 防災学協会連合組織への参加

「防災学協会連携体」が主催、連携するシンポジウム等に参加し報告を行う。

(12) 地域安全学 夏の学校2024－基礎から学ぶ防災・減災－の実施

大学生・大学院生を主な対象として、セミナーを開催する。

日時：2024年8月23日

場所：兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科

(13) 実務者企画委員会

実務者にとってニーズの高いオンライン勉強会を開催し、講師の了解の得られた講演動画を実務者企画委員会YouTubeチャンネルで公開し、実務者の防災関係の研修受講機会の拡大を進める。またこれらの活動により、地域安全学会の活動を広く知ってもらう機会とする。また、ぼうさいこくたい2024に参加し、地域安全学会としての活動を図る。

(14) 能登半島地震特別委員会

2023年度に引き続き、能登半島地震において被災自治体に派遣された応援職員や派遣した自治体へのインタビュー調査、ならびに支援を受けた被災自治体へのインタビュー調査を通じて、災害時の応援職員派遣の課題について調査研究をおこなう。

## 5. 2024年度予算

### 2024年度地域安全学会予算

(2024年4月1日～2025年3月31日)

収入の部

(単位：円)

科 目	2024年予算	2023年決算	備 考
1.会費収入	4,260,000	4,288,000	正会員:7,000円×570名 学生会員:2,000円×85名 賛助会員100,000円×1社
2.寄付金収入	0		
3.受取助成金等	100,000	100,000	春季大会開催助成金
小 計	4,360,000	4,388,000	
4.春季研究発表会			
1)事業収益			
ア 梗概集登載料	750,000	740,000	登載料 10,000×65名、5,000×18名
イ 梗概集販売料	2,000	1,130	CD-R：1,000円×2枚
2)雑収入			
ア 懇親会費		0	
イ 視察費	160,000	160,000	5,000円×32名
ウ その他	0	23,100	
小 計	912,000	924,230	
5.秋季研究発表会			
1)事業収益			
ア 梗概集登載料	400,000	400,000	登載料 (ページ数対応5,000円/2ページ) ×40名
イ 梗概集販売料	1,000	1,130	CD-R：1,000円×1枚
2)雑収入			
ウ その他	0	0	
小 計	401,000	401,130	
6.東日本大震災連続ワークショップ			
1)事業収益			
ア 論文集登載料	130,000	130,000	登載料 10,000円×10名、15,000×2名
イ 論文集販売料	16,000	16,000	1冊：2,000円×8部
2)雑収入			
ウ その他	68,000	72,000	見学会：4,000円×17名
小 計	214,000	218,000	
7.学術			
1)事業収益			
ウ 論文集登載料	1,840,000	1,840,000	登載料 (2万円+5,000円/2ページ) ×59名
エ 論文集査読料	780,000	780,000	査読料：1編10,000円×78名
オ 論文集販売料	72,630	72,630	1冊：4,000円×18部
カ DVD販売料	20,000	0	1枚：2万円(会員価格)×1枚
2)雑収入			
ア その他	275,000	275,000	オンライン投稿査読システム利用料 5,000円×55編 日本災害情報学会 日本災害復興学会より
小 計	2,987,630	2,967,630	
8.受取利息	84	84	
9.その他	0	0	
収入合計	8,874,714	8,899,074	

## 支出の部

(単位：円)

科目	①予算	②決算	備 考
1.事務局・総務			
1) 人件費	0	9,000	
2) 通信費・広報費	150,000	131,838	切手、送料、電話代等
3) 印刷編集費	30,000	22,000	コピー代、封筒印刷代
5) 旅費交通費	250,000	178,462	大会等事務局交通費、宿泊費
6) 交際費	5,000	0	
7) 委託費	330,000	330,000	会計事務所月25,000円＋税 6年4月～7年3月、メールアドレス運用代
8) 消耗品費	20,000	17,118	消耗品、10万円以下の備品
9) 事務用品費	5,000	3,300	事務用文具等
11) 支払手数料	80,000	6,160	銀行振込手数料、役員登記手数料
12) 謝金	0		
14) 事務局費	1,728,000	1,728,000	委託費月144,000円×12 6年4月～7年3月
15) 租税公課	10,000	9	源泉所得税、利子税、登録免許税、収入印紙代等
16) 運営費	50,000	47,220	メダル氏名等刻印費
17) 雑費等	5,000	0	
99) 予備費	70,000	70,000	前期の法人税等
小 計	2,733,000	2,543,107	
2.広報			
7) 委託費	160,000	156,200	サーバ利用料・保守費用
11) 支払手数料	1,000	660	銀行振込手数料
小 計	161,000	156,860	
3.総会・理事会			
1) 人件費			
ア アルバイト給料	0	0	
2) 通信費・広報費	50,000	52,800	Dropbox利用料等
3) 印刷編集費	30,000	0	案内送付用封筒・ハガキ・案内資料印刷
4) 会議費	30,000	29,360	理事会 会場費
5) 旅費交通費	300,000	270,524	理事会 旅費交通費
11) 支払手数料	5,000	1,815	銀行振込手数料
12) 謝金	0		
小 計	415,000	354,499	
4.学術			
1) 人件費(アルバイト給料)			
ア アルバイト給料	60,000	57,000	論文データ等アップデート作業代
2) 通信費・広報費	50,000	36,830	論文送送料
3) 印刷編集費	1,000,000	867,075	論文集No.44,45 印刷料、コピー代
4) 会議費	30,000	0	学術委員会昼食代、飲食代
7) 委託費	800,000	639,544	研究発表会論文オンライン査読システム委託費 年間基本利用料：637,221
11) 支払手数料	10,000	825	銀行振込手数料
16) 運営費	60,000	45,849	査読者昼食代
小 計	2,010,000	1,647,123	
5.国際交流			
5) 旅費交通費	500,000	0	5 ACUDR 若手研究者渡航費補助
11) 支払手数料	10,000	0	
13) 補助等	0	0	
16) 運営費	100,000	0	
小 計	610,000	0	

科目	①予算	②決算	備 考
6.春季研究発表会			
1) 人件費 (アルバイト給料)	100,000	60,600	梗概集作成作業
2) 通信費・広報費	5,000	0	郵送料
3) 印刷編集費	170,000	163,900	梗概集No.54 PDF+CD10部
4) 会議費	10,000	0	会場代
5) 旅費交通費	200,000	166,586	現地見学会等バス代、パネリスト交通費
6) 交際費	60,000	63,350	懇親会費用
8) 消耗品費	15,000	12,975	賞状用紙他
11) 支払手数料	3,000	1,485	銀行振込手数料
12) 謝金	60,000	60,000	パフォーマー、パネリスト
16) 運営費	400,000	591,453	運営機材利用料、看板代、現地見学会費用 (昼食代含む)
17) 雑費等	0		
小 計	1,023,000	1,120,349	
7.秋季研究発表会			
1) 人件費 (アルバイト給料)			
ア アルバイト給料	50,000	41,580	
2) 通信費・広報費	20,000	16,730	梗概集送料、賞状送付料
3) 印刷編集費	65,000	72,600	梗概集No.55
5) 旅費交通費	5,000	2,280	アルバイト交通費
6) 交際費	80,000	74,640	懇親会会場代、料理代
8) 消耗品費	10,000	11,444	賞状、賞状用筒、備品
11) 支払手数料	1,000	1,045	
12) 謝金	30,000	30,000	パフォーマー謝金
16) 運営費	500,000	489,637	昼食、飲み物代、パネル設置代
小 計	761,000	739,956	
8.東日本大震災連続ワークショップ			
2) 通信費・広報費	5,000	1,650	
3) 印刷編集費	120,000	123,200	特別論文集No.12(CD付)
5) 旅費交通費	100,000	82,500	現地見学会等バス代
6) 交際費	50,000	15,530	懇親会会場代、料理代
11) 支払手数料	1,000	495	銀行振込手数料
12) 謝金	0	0	
16) 運営費	100,000	38,350	見学会費用 (昼食費含む)
小 計	376,000	261,725	
9.実務者企画委員会*			
4) 会議費	100,000	128,986	Zoom 機材レンタル
5) 旅費交通費	250,000	246,340	視察交通費・宿泊費
11) 支払手数料	2,000	2,750	
12) 謝金	30,000	30,000	
16) 運営費	218,000	0	
小 計	600,000	408,076	
10.能登半島地震特別委員会*			
11) 支払手数料			
16) 運営費	300,000		テーブル起こしなど
小 計	300,000	0	
11.出版企画委員会*			
11) 支払手数料			
16) 運営費	300,000		テーブル起こしなど
小 計	300,000	0	
10.その他事業			
2) 通信費・広報費	50,000	0	
4) 会議費	50,000	40,500	会場代 (社会に役立つ防災情報システム研究小委員会)
5) 旅費交通費	100,000	0	
11) 支払手数料	1,000	330	銀行振込手数料
13) 補助等	55,000	40,000	安全工学シンポジウム共催分担金、防災学術連携体会費
16) 運営費	100,000		安全・安心若手研究会の運営費:100,000円 (交通費も含む)
小 計	356,000	80,830	
支出合計	9,645,000	7,312,525	
収入-支出		-770,286	

なお、科目間の流用を認めます。

## (2) 地域安全学会春季研究発表会における優秀発表賞について

地域安全学会 表彰委員会

地域安全学会では、春季・秋季研究発表会での一般論文の研究発表（口頭発表・ポスター発表）を対象として優秀発表賞を平成24年度に創設し、表彰を行っております。2024年5月24日に、小千谷市総合産業会館サンプラザで実施された地域安全学会春季研究発表会におきましては、68編の口頭発表が行われました。そのうち事前に応募登録された方を選考対象とすることといたしました。

今回は34編の応募登録があり、下記の審査要領に従って採点を実施しました。採点終了後に優秀発表賞審査会を開催して厳正なる選考を行いました。審議の結果、以下の5名の方々に授賞対象者として選出いたしましたことをここに報告いたします。

- ・金山侑真（東北大学大学院工学研究科）「東日本大震災後の災害危険区域における土地利用の変遷に関する研究」
- ・西村実穂（東京未来大学こども心理学部）「令和5年7月豪雨による秋田市内の幼保施設の被災と保育継続」
- ・則竹桃実（東京大学大学院工学系研究科）「大規模水害発生時の域内避難の場所として活用可能な民間施設種の検討ー江東5区の民間施設を対象としたヒアリング調査からの考察ー」
- ・福本晋悟（毎日放送報道情報局報道センター）「令和6年能登半島地震の初動特別番組でキャスターは何を伝えていなかったか」
- ・森保純子（同志社大学大学院社会学研究科）「コミュニティ支援と避難ダイナミクス可視化のためのエージェント・ベースド・シミュレーションモデルの開発」

（五十音順/敬称略）

なお、この選考結果につきましては、学会HPにおいて発表しました。表彰式につきましては、11月の秋季研究発表会の懇親会の場にて行う予定です。

今後の研究発表会におきましても、引き続き優秀発表賞の選考を行いますので、奮って投稿・発表していただきますようお願いいたします。

「地域安全学会優秀発表賞」審査要領(平成24年5月26日制定)(平成28年3月26日改定)(令和2年4月17日)

### 1. 授賞対象者

「地域安全学会優秀発表賞」の授賞対象者は、地域安全学会 研究発表会（春季・秋季）もしくはオンライン研究報告会での一般論文の研究発表（口頭発表・ポスター発表・オンライン口頭発表）の発表者であり、原則、研究実施または論文作成において指導を受ける立場にある40歳（当該年度4月1日時点）未満の者と

する。ただし、実務者等は研究歴等を考慮し年齢規定を緩和することもある。再受賞は認めない。また、予定された発表者ではない代理発表者及び一般論文登録時に審査を希望しない旨登録した者は対象外とする。

## 2. 審査方法

1) 表彰委員会委員全員，学会長・副会長，学術委員会委員長・副委員長，学術委員会電子ジャーナル部会長・副部会長，春季研究発表会実行委員長，秋季研究発表会実行委員長，および別途指名される採点委員から構成される優秀発表賞審査会が審査を行う。

2) 採点委員は，研究発表（口頭発表，ポスター発表もしくはオンライン口頭発表）時に，評価シートを用いて各発表者の採点を行う。

3) 優秀発表賞審査会では，すべての採点委員により提出された評価シートに基づいて審議を行い，受賞者を決定する。

4) 審査の実施細目は別途定める。

## 3. 表彰

1) 賞は「地域安全学会優秀発表賞」と称する。

2) 「地域安全学優秀発表賞」の受賞者には，賞状を贈呈する。

3) 受賞者発表および表彰式については実施細目に定める。

以上



## 5. 第 54 回(2024 年度)地域安全学会研究発表会(春季)開催報告

### (1) 研究発表会

#### A-1 セッション 5月24日 14:00~15:20

本セッションでは、A01: 災害対策本部事務局の体制とデジタル技術の整備状況について、A02: 火山災害の総括支援チームの創設について、A03: デジタルファブリケーションを活用した防災活動、A04: 地域防災人材の育成と活躍の場づくりー清流の国ぎふ 防災・減災センターの事例からー、A05: 兵庫県内の近代歴史遺産の自然災害被災リスク検証と今後の保全 活用に向けた防災・減災対策の現状と課題、A06: 阪神・淡路大震災後 10 年における地元建設業の災害対応の実態と課題 -東日本大震災の災害対応を迫られた同業者とのフォーカスグループインタビューを通じて-、A07: ヒアリング調査に基づく山梨県における救急車現場到着時間の延伸要因の検討、A08: モバイル空間統計を用いた令和 6 年能登半島地震における広域避難者の集計と類型化、以上 8 編の研究発表が行われた。いずれの研究発表でも会場から複数の質問コメントがあがっていた。研究の対象として、災害・救急対応の課題分析や DX 化での解決を目指す研究、阪神淡路大震災や東日本大震災からの追跡調査にあたる研究内容等が見られる一方、直接の対象ではないものの、各自の研究・発表内容に令和 6 年能登半島地震での事例にからめた示唆を行う発表も見られた。合わせて次の災害に備えた人材育成・教育の取り組む研究など、多彩な研究発表の場となった。

(文責：杉安和也)

#### A-2 セッション 5月24日 15:30~17:00

本セッションでは、(A-9) 防災と復興支援のための低軌道衛星インターネット Starlink の活用、(A-10) 水害常襲地域におけるシビックプライドに関する基礎的研究、(A-11) 令和 5 年台風 13 号による千葉県内の幼保施設の浸水被害と保育継続、(A-12) 令和 5 年 7 月豪雨による秋田市内の幼保施設の被災と保育継続、(A-13) 大規模水害発生時の域内避難の場所として活用可能な民間施設種の検討ー江東 5 区の民間施設を対象としたヒアリング調査からの考察ー、(A-14) 2021 年 7 月河南省水害における避難行動の調査結果、(A-15) 岩手県宮古市田老地区における夜間避難訓練の取り組み その 3ー自動車避難による避難体験プログラムの構築ー、(A-16) ウェラブル歩行型 VR を用いた津波避難行動分析ツールの試作、(A-17) 災害後の中小企業支援施策の特徴整理ー東日本大震災以降の災害に着目してーの 9 つのテーマについて発表と質疑を行った。

会場からは、発表された研究課題の手法の意義・妥当性や発展性、研究成果の活用方法等について質問・コメントがあった。例えば、(A-9) では、災害時に備えた平時からの Starlink の利活用の方向性と重要性が議論された。(A-10) では、シビックプライドの評価項目の設定基準や、防災や水害対策との関連性の展望について議論された。(A-11) では、幼保施設の BCP 策定の際の衛生面などの配慮事項について議論された。(A-12) では、保護者に子供を引き渡せない場合を想定した宿泊避難の現状と対策について議論がなされた。(A-13) では、厚生施設と福祉施設、中間避難場所など重要な用語の背景や定義について議論がなされた。(A-14) では、日本と中国河南省で避難行動が異なる要因として、国の予警報体制や情報伝達システムの違いについて議論がなされた。(A-15) では、津波を想定した自動車避難訓練において、渋滞等を避けた台数制限への配慮について議論がなされた。(A-16) では、ウェアラブル歩行型 VR の操作性や歩行速度など設定変更の可能性について議論がなされた。(A-17) では、南海トラフ地震等を想定した国の制度化された支援と災害後に拡充される支援の境界・設定のあり方について議論がなされた。

(文責：柄谷友香)

## B-1 セッション 5月24日 14:00~15:20

本セッションでは、令和6年能登半島地震に関する7件の発表と子ども向けヒーロードラマを利用したの防災教育の取り組みについての発表1件(B04)があった。令和6年能登半島地震に関しては、金沢市に開設された輪島市からの避難者向けの避難所の実態(B01)、LGBTQ当事者への災害時支援の実践(B02)、ゼネコン社内の応急対応におけるSNSや道路通行情報による情報収集(B04)、輪島市災害対策本部における安否不明者の氏名公表プロセス(B05)、輪島市災害対策本部の初動期の空間配置の変遷(B06)、行政による仮住まい支援とボランティア団体による支援の概況(B07)、被災前の奥能登地域の産業の特徴の分析(B08)について、発表と質疑があった。

特に、B05、B06は輪島市災害対策本部で活動した応援職員の方々が筆頭著者、輪島市職員の方々を共著者として発表された。災害対策本部における初動期業務の実態について克明に記録・整理されており、次の災害に向けた改善すべき点等について議論が交わされた。記録に残りにくい初動期の災害対策本部内業務の厳しい状況についての記録としても大いに価値があり、それが応援職員の方により行われたことも特筆すべきである。

(文責：益呂明伸)

## B-2 セッション 5月24日 15:30~17:00

本セッションではB09：令和6年能登半島地震の初動特別番組でキャスターは何を伝えていなかったか、B10：令和6年能登半島地震における自治体間の支援体制に関する実態調査、B11：令和6年能登半島地震におけるブロック幹事県の活動体制について、B12：令和6年能登半島地震における避難行動の自治体別特徴－避難所の立地環境・孤立集落の解消・被災状況の観点から、B13：令和6年能登半島地震における、被災地外人口流出入の動向の可視化-発災前後1ヶ月の地域外人口・県外人口と道路復旧状況に着目して、B14：「能登半島地震復興まちづくり支援マップ」の作成・公開と利用、B15：東日本大震災時の津波避難等に関する調査－岩手県野田村での事例、B16：東日本大震災後の災害危険区域における土地利用の変遷に関する研究の計8本の発表があった。

質疑応答も活発に行われ、B09では放送業界の中にいるからこそその視点の報告、その実態を踏まえた上での研究方法や今後の発展の報告性について、B10では応援を出せないのは小さい自治体、被災地からの距離によって支援内容に違いがあるなど、今後の応援受援の仕組みを考えるのに役立つような示唆について、B11では三重県独自の県内市町村の職員との混成チームについてや、今回の事例から得られたGADMの仕組みについての課題について、B12では通信障害など被害によるデータ取得の影響、分析のメッシュサイズ、モバイル統計を使うことの意味など、新しいツールの活用方法について、B13ではこういったシステムを用いた研究や災害対応の可能性の検討について、B14では継続的なデータの蓄積と維持、維持するための体制(資金と人手)など、本研究やその成果を今後の災害でも活かすための議論が、B15ではこれまでの他の地域での調査結果も含めての全体的な発見や、地域ごとの違いや気づきについて、B16では復興に関するユニークな視点についてと今後の被災地復興に対する示唆について、質疑や議論、コメントが飛び交った。

(文責：松川杏寧)

## C-1 セッション 5月24日 14:00~15:20

本セッションでは、(C-1)震災火災時におけるスタンドパイプの有効活用方策について、(C-2)逃げ地図づくりを活用した津波避難計画の策定手法の構築－和歌山県由良町小引地区を事例として－、(C-3)文献レビューによる事前復興計画論の再概念化と機能の抽出、(C-4)レジリエンスの実現と標準化を見据えた防災備蓄手

法に関する研究、(C-5) レジリエンスの実現と標準化を見据えた避難所におけるエネルギー収支等に関する実態調査～東日本大震災の被災地域を事例に、(C-6) 地震災害記録誌からの課題分析、(C-7) 防災リテラシーの先有傾向と防災体験活動・支援活動への選択的接触に関する追補的分析：3 時点パネル調査データから、(C-8) 自治体の受援力強化に向けた図上演習の事例報告：広島県における県・市町危機管理人材育成研修、の 8 つのテーマについて発表と質疑を行った。

会場からは、以下に挙げたような内容について活発な質疑応答・議論がなされた。例えば、(C-1) では、スタンドパイプを用いた学生実験による有効活用方策について議論された。(C-2) では、南海トラフ地震想定エリアにおける津波避難計画の策定実践事例に関する報告内容について議論された。(C-3) では、阪神・淡路大震災以降の約 30 年間に蓄積された事前復興研究を類型化した 7 つの機能について議論された。(C-4) では、地方公共団体における物資の備蓄の方法として、共同購入と流通在庫備蓄の事例と今後のあり方について議論がなされた。(C-5) では、避難所の運営・生活環境の維持に必要な電力消費の検討フレームの提案と試算結果について議論がなされた。(C-6) では、自治体が発行する災害対応記録誌・災害検証報告書から抽出された過去災害に共通する課題要因とその傾向について議論がなされた。(C-7) では、津波を想定した自動車避難訓練において、渋滞等を避けた台数制限への配慮について議論がなされた。(C-8) では、3 回のパネル調査によって防災リテラシーの先有傾向と防災諸活動への選択的接触に関する先行研究に関する妥当性の検証結果について議論された。

(文責：佐藤翔輔)

## C-2 セッション 5月24日 15:30～17:00

本セッションでは、(C-9) 流域治水プロジェクトにみる水害を対象とした事前復興まちづくりの取り組み、(C-10) 特別支援学校における潜在的減災力に関する研究大阪府立支援学校における実践事例から、(C-11) コミュニティ支援と避難ダイナミクス可視化のためのエージェント・ベースド・シミュレーションモデルの開発、(C-12) 災害伝承施設の機能強化に関するアクションリサーチ：みやぎ東日本大震災津波伝承館を対象にして、(C-13) 介護支援専門員等の防災対策と防災意識の現状と課題：兵庫県太子町での研修事例から、(C-14) 災害時における障害者の避難支援の現状と課題—東京都内障害福祉専門職への調査から—、(C-15) 基礎自治体における重層的支援体制整備による防災部局との連携について、(C-16) ランダムサンプリング郵送調査とウェブモニター調査におけるリスク認知・防災行動項目の回答傾向、の 8 件の論文について発表と質疑が行われた。

(C-9) では今後の課題としてどのようにハード対策とソフト対策を評価していくかが指摘され、(C-10) では肢体不自由児特有の課題などが質疑応答において議論された。また (C-11) では今後どの部分のシミュレーションを精緻にさせていくか、という指摘がみられ、(C-12) では新たに発掘されたボランティア解説員について熱心な質疑が見られ、(C-13) では兵庫県における多様な研修の成果がどのような効果があったか、という点が指摘された。(C-14) では障害福祉専門職と地域との接点の少なさが指摘され、(C-15) では重層的支援体制整備と個別避難計画との親和性が報告され、発災前、発災後などの時間軸で再整理する必要性が指摘された。(C-16) は Web 調査と郵送調査の回答傾向の差について議論が展開され、今回の発表では大きな差が見られなかったものの、多変量解析となると差が出る可能性が質疑応答において指摘された。

(文責：大津山堅介)

## D-1 セッション 5月24日 14:00～15:20

本セッションでは、(D01) 令和 6 年(2024 年)能登半島地震の強震動の特徴、(D02) P 波初動部分により推定したサイト増幅特性のばらつき、(D03) 地震動強度を用いた機械学習による建物の損傷推定、(D04) モバイル空間統計を用いた令和 6 年(2024 年)能登半島地震の七尾市における住民の避難行動、(D05) 深層学習によ

る旧版地図からの低湿地抽出，(D06)災害時流出 LP ガス容器のドローン探索，(D07) 公共土木施設災害復旧事業における土木行政の応急対応と課題，(D08) 建物被害認定調査における調査員の損傷程度の判断に関する考察の 8 件について発表と質疑を行った。

会場からは，発表された研究成果の解釈や活用方法，研究課題の発展性等について質問・コメントがあった。具体的には，(D01)では，結果の解釈や意味に関する質疑が行われた。(D02)については，研究に着手したモチベーションや研究の意義に関する質疑がなされた。(D03)では，使用データの諸元や建物構造による固有周期に関する議論が行われた。(D04)では，結果の解釈や，モバイル空間統計データの信頼性に関する質疑が行われた。(D05)では，研究成果と治水地形分類図との違いや，地図内の文字データの処理方法に関する質疑がなされた。(D06)では，他のセンシング技術の応用に関する議論がなされた。(D07)では，土木行政特有の課題の有無に関する質疑がなされた。(D08)では，専門家の判断に基づく AI 画像認識技術の開発に関する議論がなされた。

(文責：佐藤史弥)

## D-2 セッション 5月24日 15:30~17:00

水害と地震災害に関していろいろな研究成果が報告された。(以下敬称略) 鮫島は中小河川の氾濫危険度に関して携帯端末を使った地形測量を活用する試行結果を報告している。杉本は地震被災度判定を省力化するために複数のスマホ写真を活用する方法を報告している。山田は断層すべりを再現する 3次元解析結果を示し，従来の解析との差異を報告している。佐藤は南海トラフ地震において地盤沈下により長時間浸水するリスク評価結果を報告している。四井は 2023 年トルコ・シリア地震においてアンケートを行った結果を報告している。松岡はリモートセンシングによる老朽化した PC 橋の変位計測結果を報告している。石原は防災倉庫に備蓄された物品の現地調査結果に基づきその過不足の実態を報告している。藤原は能登半島地震における自治体応援職員を含めた業務運営体制の調査結果を報告している。テーマはさまざまであったが熱心な質疑が行われた。

(文責：鈴木崇伸)

## (2) 公開シンポジウム

2024年10月には、激甚な被害をもたらした新潟県中越地震から20年を迎える。今年は、当時の激甚な被災地となった小千谷市を会場として、小千谷市との共催により公開シンポジウムを企画した。シンポジウムのテーマは、「震災から20年、あのとき・いま・これからの小千谷市」とし、当時の災害対応と、被災からの復旧・復興、そしてこれからの小千谷市に焦点を当て、人口減少化における災害対策、復興まちづくり、教訓継承のあり方や課題について考え、登壇者、参加者とともに議論を深めることができた。

日時：2024年5月25日(土) 10:00～12:00

会場：小千谷市総合産業会館 サンプラザ・大ホール（新潟県小千谷市城内1丁目8-25）

主催：一般社団法人地域安全学会

共催：小千谷市

### 1) 挨拶

主催者挨拶 田中 聡 一般社団法人地域安全学会会長・常葉大学 教授

### 2) 基調講演

宮崎 悦男 氏（小千谷市 市長）

### 3) 講演・ディスカッション

重川 希志依 氏（常葉大学 名誉教授）

澤田 雅浩 氏（兵庫県立大学 准教授）

ディスカッション コーディネータ 佐藤 翔輔 氏（東北大学 准教授）

### 4) 閉会挨拶 小山 真紀 一般社団法人地域安全学会副会長・岐阜大学 准教授



公開シンポジウム。宮崎悦男小千谷市市長をお迎えして行われたパネルディスカッション

### (3) 巡検

2024年5月25日の午後、新潟県中越地震の小千谷市における被災地を巡る巡検を企画した。約60名の学会員が参加し、人口減少化における災害対策、復興まちづくり、教訓継承のあり方等を考える機会とすることができた。



山古志木籠「中越地震復興記念碑」にて



## 6. 2023 年度研究運営委員会活動報告

研究運営委員会

委員長 大原美保（東京大学）

研究運営委員会では、地域社会の安全性の向上に関する学術・文化・社会の進歩発達に寄与することを目的として、学会が自主的に実施する研究（企画研究）と、外部からの委託申し出によって行う研究・調査（受託研究）の運営を行っています。2023 年度の下記の 3 つの企画研究小委員会の活動概要を報告します。2024 年度も、これらの研究小委員会が継続して活動を行っています。

### ■企画研究小委員会

#### (1) DE&I 防災研究小委員会（2023-2025 年度）

主査：小山真紀（岐阜大学）

本研究委員会では、DE&I(Diversity, Equity and Inclusion) 防災の現状と課題、実効的な対策とそれを進める方策などについて、現地調査に基づいて明らかにする。現地調査とオンライン勉強会を開催する。勉強会は委員会メンバーだけでなく、関係する領域の研究者や実践者に広く公開し、研究的な成果だけでなく、促進に向けたネットワークを段階的に構築する。先進的な取り組みの調査とその結果を研究者・実践者と共有するための勉強会を行うことで、実践的な研究を行うことを目的とする。

2023 年度は、2024 年 2 月 4 日から 6 日まで、1 月 1 日に発生した能登半島地震の現地調査を行った。被災状況の確認と避難所環境などについてインタビューを実施した。

（文責：小山真紀 主査）

#### (2) 社会に役立つ防災情報システム研究小委員会（第 4 期）（2021-2023 年度）

主査：浦川豪（京都大学）

本研究委員会は「電子情報通信学会 情報・システムソサイエティ」と共同で、東日本大震災の長期的な復興、並びに次なる災害を想定し、若手研究者を中心とした人材のネットワークを構築すると共に、様々な情報システム技術を連携・融合させることで、情報混乱期における現場対応を支援する防災情報システムのあり方について研究を進めている。

2023 年度は、2024 年 3 月 29 日（金）13:30-16:30 に、地域安全学会・電子情報通信学会共催により第 13 回目となる研究会を京都アカデミアフォーラム大会議室 D で開催し、6 題の研究発表が行われ、活発な意見交換が行われた。総合討議においては、2024 年能登半島地震後の災害対応 DX 支援に関する取り組みが共有され、現場で役立つ情報システムについて議論された。

<https://sites.google.com/site/drisjw/event/dris13>

引き続き、2024 年度も継続することとなり、活動を進めていく予定である。

（文責：浦川豪 主査）

以上

## 7. 東日本大震災連続ワークショップ 2024 in 浪江町 開催報告

東日本大震災特別委員会  
生田英輔, 佐藤翔輔, 村尾 修  
杉安和也, 松川杏寧, 寅屋敷哲也

2024年8月9日(金)～10日(土)の2日間、「東日本大震災連続ワークショップ 2024 in 浪江町」を開催いたしました(主催:地域安全学会, 協力:株式会社いのちとぶんか社)。東日本大震災連続ワークショップは、2011年3月11日に発生した東日本大震災の被災地を開催場所として、同震災を教訓とした今後の防災と復興について現場で議論を深めることを目的として実施されています。これまで2012年の福島県いわき市から、岩手県大船渡市、岩手県宮古市、宮城県気仙沼市、宮城県石巻市、岩手県釜石市、宮城県南三陸町、福島県南相馬市と順調に開催してまいりました。続いて2020年夏に名取市で開催する予定でしたが、コロナ禍で延期を余儀なくされ、同年7月にオンライン研究報告会を実施しました。その後、コロナ禍が収束しない状況を鑑み延期を繰り返しましたが、2022年の夏には3年ぶりの現地開催として宮城県名取市にてワークショップを開催しました。2023年は8月に岩手県陸前高田市でワークショップを開催しております。

2024年は福島県の浪江町が開催地となりました。現地開催としては11回目となる今回のワークショップには、研究者・行政・学生の方々、約40名に参加いただき、活発な意見交換や交流が行われました。本ワークショップは、基調講演、研究発表会、懇親会、現地見学会の4部構成となっており、浪江町役場はじめ、地元の皆様からの多大なるご支援・ご協力を得て実施されました。

### 1. 基調講演・研究発表会・懇親会(1日目)

浪江駅前の浪江町地域スポーツセンター会議室を会場として、浪江町役場と浪江町にゆかりの深い研究者による浪江町の防災、復興、歴史に関する講演、学会員による研究発表が行われました。なお、浪江町のご厚意で、燃料電池を搭載したスクールバスからの給電による避難所での空調機器利用等のデモが行われ、参加者は興味深く見学していました(写真1)。

佐藤翔輔特別委員会委員(東北大学)による司会のもと、生田英輔特別委員会委員長(大阪公立大学)からワークショップの趣旨の説明や開催に際しての挨拶を行い、つづいて浪江町・山本邦一副町長より、歓迎のお言葉等を頂戴しました(写真2)。

基調講演では、浪江町市街地整備課 F-REI 立地室長の伴場裕史様・総務課防災安全係の渡邊善明様から「浪江町における東日本大震災からの復興の取り組み」に関する講演がありました(写真3)。また、浪江町で歴史分野から調査研究を進めてこられている、国文学研究資料館の西村慎太郎教授から「原発事故被災地の歴史・文化の継承の課題」に関する講演がありました(写真4)。

研究発表会では、13件の発表があり、活発な意見交換が行われました。最後に、村尾修特別委員会委員(東北大学)より閉会の挨拶があり、研究発表会は盛会のうちに終了しました(写真5,6)。

懇親会は、会場近くの和食店において、山崎文雄元会長の乾杯挨拶を受けて、地元の食材とお酒を楽しみました(写真7,8)。





写真 1：燃料電池搭載バスからの給電デモ



写真 2：山本副町長の挨拶



写真 3：伴場様・渡辺様の講演



写真 4：西村教授の講演



写真 5：研究発表



写真 6：村尾委員の閉会挨拶



写真 7：山崎元会長の乾杯



写真 8：西村教授から地酒の解説

## 2. 現地見学会（2 日目）

現地見学会には、約 30 名の方が参加しました。いのちとぶんか社の葛西優香様と塩野美里様の案内のもと、はじめに浪江駅から双葉駅にかけての道路から見える光景を解説いただきました。震災の被害がそのまま残る箇所や乗り捨てられた車両が見られました。その後、東日本大震災・原子力災害伝承館、福島県復興祈念公園の予定地、請戸漁港を経由して大平山公園に立ち寄りました。この公園は後に訪れる震災遺構の請戸小学校の児童が避難した場所になります。高台にある公園から海の方を見ると、離れた場所に小学校の校舎が見え、児童が避難したおよそ 1.5 km のルートを確認することができました。

次に、請戸小学校を訪れ 40 分間ほど校内を見学しました。展示物から発災前の請戸のまちの様子や小学校の日々を垣間見ることができました。一方で校舎の一部は震災の被害がそのまま残されており、海からおよそ 300 m の校舎を襲った強烈な津波のパワーを改めて理解することができました。周辺に高台のない請戸小学校では迅速かつ的確な避難行動により 80 人以上の児童と教職員が先述した公園に無事避難できたそうです（写真 8, 9）。

請戸小学校から北上し産業復興の拠点となる棚塩産業団地に移動しました。この団地には水素エネルギーやロボットの研究施設もあります。今回は福島高度集成材製造センター（FLAM）を訪れ、株式会社ウッドコアの朝田英洋様とファームおりびつつの松本幸子様からお話いただきました。朝田様からは FLAM で生産されている中大断面集成材（国産木材を接着したもの）の生産工程を紹介いただきました。ここで生産された集成材は 2025 年大阪・関西万博の会場で建設が進む、世界最大級の木造構造物である大屋根（リング）の一部に使われているそうです。松本様からは地元の浪江町に震災後に戻り、農業をはじめられたきっかけや有機農業について、アスパラガスの生産や直売について詳しく解説いただきました（写真 10, 11）。

最後に道の駅なみえに立ち寄り、参加者はお土産や帰りの列車で食べる昼食を購入し、浪江駅にて解散となりました。



写真 8：震災遺構 請戸小学校



写真 9：震災遺構 請戸小学校





写真 10：朝田様・松本様による講話



写真 11：FLAM で生産される大断面集成材



写真 12：研究発表会終了後の記念撮影

### 3. おわりに

福島県ではいわき市、南相馬市につづく 3 回目の連続ワークショップでした。この中でも浪江町は福島第一原発に近い地域で、現在も帰還困難区域等が多くあり震災から 13 年が経ちましたが原発事故の影響が続いていることを改めて理解できました。

2 日目の視察会はいにくの雨模様でしたが、県外から浪江町に移住して活動されている葛西さんと塩野さんの解説がとても充実していて学びが多かったです。今後も浪江町では多様な復興事業の予定があるということで、次に訪れる時は今とは違ったまちの様子が見られるかと思います。

今回も全国各地から多くの会員にご参加いただきました（写真 12）。浪江町の皆さん、ご参加いただいた皆さん、学会事務局他の多大なる協力で、無事にワークショップを終えることができました。この場を借りて感謝申し上げます。

（文責：生田英輔）

## 8. 第5回アジア都市防災会議(5ACUDR)若手助成採択者参加レポート

### (1) 初現地参加の国際会議の『第5回アジア都市防災会議(5ACUDR)』レポート

同志社大学大学院 社会学研究科  
森保 純子

社会人として暮らす平凡な毎日に大学院にもう一回チャレンジをする話があったから、私の人生は個人事業主社会福祉士と、同志社大学大学院の博士課程院生の2足の草鞋生活となり、平凡だった毎日が一転しました。その大学院3年間(で終わりたい)の中で、最も思い出に残る出来事の一つは、5ACUDRの参加であることは間違いありません。とても緊張し、とても興味深く過ごした数日間をレポートします。

約12年振りの海外、20年振り3度目の台湾。今回は、飛行機のチケットを自力で手配するという難問もあり、行く前は「たどり着けないかもしれない」と弱気になりながらも、今回の旅費は地域安全学会から出していただき、発表のエントリーもしているため、勇気を出して…。指導教員の立木先生には、チケットの買い方、飛行機の乗り方など海外への出かけ方をご指導いただき、いろいろご迷惑をおかけしました。ああ、無事にたどり着けて良かった…。

さて、5ACUDRでは、『Visualizing Community Support and Evacuation Dynamics through Agent-Based Simulations』をテーマに、避難支援が必要な人と地域支援者の避難の様子を、エージェントベースモデル手法を用いて可視化し、より良い避難支援の方策を考えることについて発表しました。英語での発表で、台本を用意し何度も練習をしていましたが、緊張しすぎて本番のことはあまり覚えていません。しかし、キャラクターが動いて見られるシミュレーションの良いところは、言語を超えて「百聞は一見に如かず」が可能な点です。大勢の皆様にご覧いただき、『Excellent Young Researcher Award』を頂きました。これからも社会をモデル化し、より良い解決策を見つけられるよう研究活動を続けていこうと決意した表彰式でした。



(写真右:台北の街並み。手前に見える建物には屋上に小屋が建て増ししてある。  
左:閉会式での表彰式。筆者は左から2番目。)

充実した一日が過ぎ、疲れて眠っていた夜、突然の揺れとスマホの音で目覚めました。避難場所も何もわからない場所で被災したらどうすべきか?というのわからず、大事に至らなかったのが幸いでした。翌朝調べてみると、4級(台湾の地震の等級は0~7級で数字が大きいほど強い)の地震だったようでした。どこにいても、気を抜いてはいけません。

朝になり、二日目以降は視察ツアーに参加しました。視察では、921地震教育园区や断層の保存施設を見学に行きました。被災した建物の跡や、ズレた断層など印象的でしたが、興味深いのは、台湾では地震は地中の大きな「牛」が起こすという言い伝えがあることで、日本では「なまず」説とは異なります。





(写真右:深夜2時過ぎの4級の地震情報。漢字なので内容は理解できるのがありがたい。  
左:台湾では牛が地震を起こすらしい。具体的なイメージがあり、興味深い。)

その後、集集の街へ行き、街の中を散歩&フィールドワークで見て回りました。Wuchang Temple (集集武昌宮)では、屋根より下の部分が完全につぶれているお寺が残っており、本来は高い場所にあったであろう龍(獅子?)の顔が間近に見られるところにありました。なお、同じぐらいかもっと大きな宮がすぐ前に再建されています。

集集の宿からすぐ近く、村尾先生がフィールドワークをされていた際に良く寄られていたお店にもお邪魔しました。気さくな店主がニコニコと話をされていて、居心地がよさそうな地域だという印象です。バナナの名産地、マンゴーやパイナップルなど南国のフルーツがふんだんに採れる町です。今度は旅行に来たいと思う場所でした。



(写真右:鮮やかな屋根の装飾が台湾らしいが、これは壊れた宮の屋根のもの。  
左:集集の街にあるご飯屋さんでご主人のお話を伺う、周囲はいろんなお店が並んでいた。)

その翌日は、消防士のトレーニングセンターで暗闇の中での避難を体験し恐怖を味わい、芸術文化に触れ、夜市を体験しました。他の参加者の方や現地の方と同じものを見て、食べて、経験することは、良い刺激になり、良い安らぎになり、良い生きる力になると思えました。

地震や台風という共通の自然のハザードを持つ日本と台湾が、協力して国際会議を開催し、知見を共有する場があるということは、とても素晴らしく、また大切な取り組みであると思えました。その貴重な場に参加させていただく機会を頂き、日頃できない経験を多く授けてくださった地域安全学会の皆様には感謝いたします。これからも新しい挑戦に躊躇せず、日々研究の道を歩んでいきたいと思えます。

## (2) 第五回アジア都市防災会議 (5ACUDR) で得られたもの

東北大学大学院 工学研究科 都市・建築学専攻

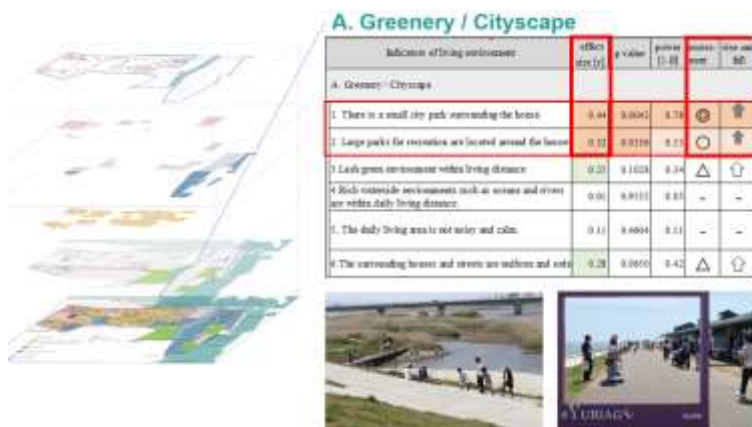
加藤春奈

### 【国際会議での発表内容】

東日本大震災後に重要な国際防災指針となった「Build Back Better (より良い復興)」は、災害後のハザードに対する物的環境改善に加え、人々の生活再建や経済・環境面の改善を意味する。しかしながら、そうした「人」視点の復興評価方法は確立されていないのが現状である。そこで、震災前後の被災者視点による居住環境評価のため、甚大な被害が生じた名取市閑上地区を対象に評価指標(緑・街並み、住まい、商業利便性、保育・教育・医療、安心・安全)を設定し、アンケート調査結果から居住環境満足度を比較し、統計的に変化が認められる項目の抽出を行った。今回提案した手法では、検定結果の効果量( $r$ )を用いた異なる地域間での居住環境満足度の比較が可能である。



沿岸被災地の人口回復状況



震災から10年経過後の被災者による居住環境評価

### 【地域安全学会からの参加者同士のつながり】

発表会に加え懇親会やツアー・街歩きなどを通して、お忙しい地域安全学会の先生方にお会いして直接お話できたこと、そして何よりも他の学生の方との繋がりができたことが、自分にとって大変有難い事であった。

同じ大学の研究棟にいながら会議参加をきっかけに初めて会えた成田さん、自分の研究にも関わる防災科研の様々な取り組みや情報を教えてくださった筑波大学の上田さん、高専から大学院への進学プロセスが全く同じであったことが判明し話が弾んだ苅米さん、研究分野が近くお互いの研究環境や普段の過ごし方などドクターコースならではの話を沢山して下さった HAEJI さんには、今回のような機会があったからこそ新たに知り合うことができた。自分にとって、こうした経験は、帰国してから研究を続ける上での励みになっている。

(右上：ツアーの様子 右下：先生方と台北 101 にて)





## 【国際交流】

今回の会議全体を通して、台湾の方にとっても親切にさせていただいた。フィールドツアーに同行していただいた台湾側の方々には、歩いているときや食事の時間を通じてお話をさせていただき、ご自身のことや日本と台湾の文化や習慣の違いについて教えていただいた。食事や他人とのコミュニケーションをととても大切にすることが印象的であった。また 1999 年の大地震で被害が生じた台湾中部の集集では、村尾先生が関わられてきた現地の方にお会いすることができ、また発表会場があった台北とは異なる街の雰囲気を知ることができた。



## 【海外での国際会議参加における経験・気づき】

海外で開催される国際会議への現地参加は今回が初めてであった。地域安全学会の先生方と台湾側の先生方のやり取りを見て、参加者の募集、宿泊場所や移動手段の手配、会場設営、お弁当や食事の準備、施設見学の準備、ツアーの調整、プロシーディング作成、当日の会場移動案内など、多くの方の協力があり国際会議が運営されている、成り立っていることを実感した。また、コロナ禍を経ての英語での対面プレゼンテーションも初めての経験で、プレゼン資料の作成・発表練習・当日の発表と質疑応答、先生方のプレゼンテーションの聴講を通し、良い経験になった。

今回、実際に自分の足で動き、自分の目で見て理解することの重要性を改めて思い知った。自分の研究室には台湾からの留学生がおり、ある程度台湾について知っているつもりであったが、現地の歴史や文化は現地に行かないと本当には理解できないのだと実感した。災害伝承・防災教育施設である「921 地震教育園區」での潰れた校舎の説明を受け、経済的理由から建物の建て増しが慣習的に行われていたこと、奇跡的に人的被害がなかったこと、が衝撃的であった。



国際会議に参加する際、日本には分からない開催地の現状について知ることができる。夜には道路空間に夜市が出現し様々なものが売られ、路地やアーケード、商店街には人が溢れて活気づいている。朝早くには、歴史のあるお寺でお香の香りが漂い、祈りをささげる人々の姿が見られる。ここで見聞きすること全てが自分にとって新鮮であり、こうした現地に息づく文化を五感で感じ取れたことは大変貴重な経験であった。



台北の夜市



夜市で寛ぐ犬たち



ホテルから見える朝の台北の街並み



ホテル近くの龍山寺

#### 【研究者としての今後の思い】

第五回アジア都市防災会議へ参加し、大変有意義な時間を過ごせたと同時に、プレゼンテーション能力や英語でのコミュニケーション能力など、自分自身の課題も浮き彫りとなった。この点については、今回の経験を糧に能力向上を図っていきたい。また、今回の会議では国ごとに異なる文化的背景がある中での災害研究の難しさについて考える機会にもなった。いかに有用で普遍的な研究成果を生み出せるか、今から自分に残された時間を最大限使い、この機会を得た様々な繋がりを活かし、今後の研究活動に勤しみたい。

最後になるが、このたびは渡航費助成のご支援をいただき、心より感謝申し上げます。



### (3) 5<sup>th</sup> ACUDR に参加して

国立研究開発法人防災科学技術研究所 防災情報研究部門  
筑波大学理工情報生命学術院システム情報工学研究群 リスク・レジリエンス工学学位プログラム  
博士後期課程  
上田啓瑚

#### 1. 国際会議での発表

私は今回初めて台湾を訪れ、本国際会議に参加した。学会冒頭の基調講演では、東北大学村尾修教授および台湾国家科学技術委員会林副主任の2名の先生から報告があった。村尾先生からは1999年9月21日に発生し、今年25年の節目を迎える「集集地震」に関する、長年にわたるフィールド調査に基づく研究について、林先生からは防災と気候変動適応とをつなぐ学際的研究についてであった。

また、令和6年能登半島地震に関する報告が地域安全学会員から行われ、日本の災害対応の課題や今後について議論が行われた。

その後、6つのセッションに分かれて研究発表が行われた。私は、リスク認知と教育に関するセッションにて、「地域のリスクを踏まえた防災教育の実践」について発表した。会場からは、日本の防災教育推進の工夫についての質問が寄せられ、日本と台湾の防災教育の現状について議論することができた。同セッションでは、地震発生時の車いすの転倒リスクに関する研究や住民に対する継続的な防災リテラシーの調査と震度計の屋内設置による意識変化についての研究発表がなされ、地震発生時のリスクやそのコミュニケーション手法について知見を深めることができた。



学会発表の様子

#### 2. 本学会からの参加者との交流

日本からの参加者には村尾会長をはじめ、都市防災を牽引される先生方が名を連ね、国際会議やフィールドツアーを通し、密な時間を過ごすことができた。3日間にわたり、研究にとどまらず多岐にわたるご指導をいただけ大変貴重な機会となった。また、本学会からの若手研究者渡航旅費助成により、同世代の若手メンバーも多く参加しており、全日程を通しお話しする機会を多くいただけ、会議後も連絡を取りあうなど、同世代の研究者との貴重な交流の機会となった。

#### 3. 台湾の研究者との交流

台湾からは想像を超える多くの研究者が集まっており、同じセッションのメンバーを中心に意見交換することができた。その中には、2024年の花蓮地震後に火災により一部校舎を消失した東華大学の先生も参加しており、当時や現在の学校の様子について伺うことができた。若手メンバーは少ない印象であったものの、Tea Breakで意見交換をすると、学部生で参加している台湾メンバーもあり、現地学生との交流もできた。

会議後のReceptionでは、私の所属する筑波



九二一地震教育園區の様子

大学に集中講義で来ていただいている国家台湾防救科技中心のWei-Sen先生やGloria先生など、筑波大学にゆかりのあるメンバーとの親睦も深めることができ、フィールドツアー中には、今年4月3日に台湾東部で発生した花蓮地震の際の災害対応についても詳しくお聞き、台湾での災害時の情報共有等の最前線について学ぶことができた。

#### 4. フィールドツアーを通して

今回、初めての台湾訪問であったが、フィールドツアーを通し、台湾に赴くなら訪れるべきフィールドを、貴重な解説付きで巡ることができ、台湾のこれまでの災害や現在の防災の取り組みについて研鑽を積むことができた。

フィールドツアーでは、1999年に発生した台湾集集地震の復興に関する長期的な現地調査を続けてきた村尾会長からの説明を交えながら、九二一地震教育園區、集集鎮、車籠埔断層保存園區、台湾国立消防署訓練センター、台中国立歌劇院などを訪問した。

25年経った今でも、当時の倒壊した建物等がそのまま残されており、来訪者に対し25年前のリアルを伝えていた。

#### 5. 今後について

本会議に参加し、先輩研究者の方々の長年にわたるフィールドと連携した研究の一端を学ぶことができた。改めて、継続的な現場との対話を通じた研究が重要であると感じた。本会議で生まれた台湾や日本の研究者とのネットワークを大切にしつつ、長期的な防災研究を進めていきたい。

本会議の準備および運営をしていただいたすべてのみなさま、若手研究者渡航旅費助成をいただいた本学会に感謝を申し上げます。



集集鎮での村尾先生の解説の様子

## (4) 第五回アジア都市防災会議 2024 活動報告

東北大学大学院工学研究科 津波工学研究室 (D1)  
成田 峻之輔

### 【研究発表 in 台北】

東北大学の村尾教授・台湾国家科学技術委員会の林副主任による基調講演を聴講し、震災当時から現在に至るまでの復興の過程や Build Back Better に向けた被災地の取組・研究アプローチについて学んだ。その後、災害避難・緊急時対応に関連するセッションにて「デジタルツインによる津波避難誘導設計～VRを用いたバルーン型避難標識の効果検証～」について発表し、同じくデジタルツインや避難をテーマとした研究を中心に聴講した。災害時避難の課題を対象とした研究における多様なアプローチ手法 (ABM や機械学習等) について広く学んだ他、現地の方々の発表の聴講を通して台湾における防災の制度や救助プロセス、既存のプラットフォーム (LINE, Google 等) と連携した災害時の情報伝達システムなどについての説明を受けた。



研究発表の様子

### 【フィールドツアー】

#### 1) 九二一地震教育園区

1999 年に台中で発生した巨大地震を後世に伝え残すための災害伝承施設。建物倒壊のメカニズムを再現する体験型装置やアニメキャラを用いた解説など、災害教育の間口を広げるための工夫がみられた。この施設の一部は現在も小学校の教室として機能しており、用途が単なる伝承施設のみではなく現地の生活と一体化している点が特徴的であるが、これは当時子供が犠牲にならなかったことも一因となっていると考えられる。



小学校校庭に現れた断層のずれ

#### 2) 集集鎮の街歩き

強い揺れにより壊滅的なダメージを受けた集集鎮が再構築されるまでの過程を知るため公営住宅や公園、橋などを巡り歩いた。現在は町の一部は観光地化されており被害の痕跡を実感する箇所は少ない印象だったが、当時倒壊した寺院がそのまま残されており、被害を伝え残す町の意向を感じた。一方で、首長交代の度に復興方針が変わってしまうことで当時の復興計画に一貫性が保たれずに進んだ痕跡を確認できる箇所も見受けられた。



倒壊したまま保存されている寺院

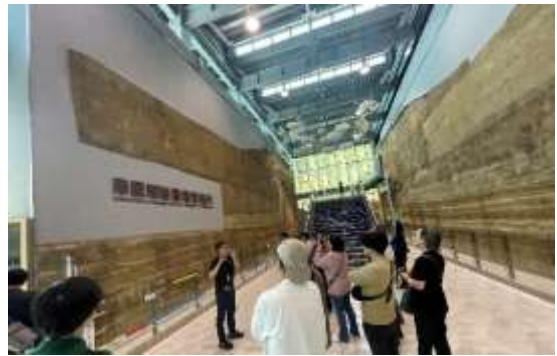


### 3) 車籠埔断層保存園区

震災後に実施された大規模な地質調査の痕跡がそのまま保存されている施設。有史時代に発生したと考えられている震災について、その時代の歴史的書物と共に解説しており、歴史的にみても台湾が頻繁に地震被害を受けていることが分かる。地質調査の痕跡を確認できる棟は工事中であったものの、その痕跡を室内で維持するための浸水防止策・湿度管理の困難さについて学芸員に解説いただいた。

### 4) 台湾消防署訓練センター

台中にあるアジア最大の消防訓練施設にて災害時の緊急対策室や災害救助犬の訓練の様子を見学したほか、現地の消防隊員が着用する装備の試着や暗闇中の移動訓練等を体験した。また消防での研究開発物を紹介する展示棟では、開発担当者から、アイデアを実用化するまでの経緯を一通りご説明いただいた。VR・ARを活用した訓練やその記録を活用した研究についてもご説明いただいた。



断層面を確認できる展示物



消防士の装備（1着あたり25kg）

## 【成果】

### 1) 国際会議での発表経験

時間制限のある中で研究の全体像を伝えるために優先して説明すべき情報について整理し、情報の取捨選択により一層考慮して資料作成にあたった。国際会議では前提知識の共有が抜けがちになることを踏まえて準備した発表であったが、全体のストーリー構成など、反省点が残る箇所もあった。

### 2) 地域安全学会の参加者同士のつながり

防災に対して様々なアプローチで挑む先輩・同期との交流は自身の研究のスタイルや方針を客観視し、ブラッシュアップする上で有益な機会だった。特に、機会学習の位置づけやその役割についての学びもあり、自らの研究にも取り入れるモチベーションになった。また、学術の場で活躍されている先生方から研究キャリアについて様々な立場・視点からアドバイスをいただいた。

### 3) 台湾との国際交流

訪問した先々で現地の研究者や職員と積極的に交流し、学びを深めるきっかけを得ることができた。

## 【今後に向けて】

今回、台湾で現地の訪問、人との交流を通して得た学びや気づきは新鮮で貴重なものだったが、訪問した先々での充実した受け入れ態勢があつてのことだと感じた。本会議への参加は研究活動自体の改善だけでなく、そのアウトリーチや外部の方との関係のあり方についても考える機会であった。今後の研究活動の一環として、そのような側面にも力を入れていきたい。

## (5) 第 5 回アジア都市防災会議に参加して

同志社大学大学院 社会学研究科

藤本 慎也

2024年4月26日から28日にかけて、台湾にて開催された第5回アジア都市防災会議（5ACUDR）に参加させていただきました。参加にあたっては、地域安全学会より若手研究者渡航旅費助成として渡航費をご支援いただきました。まず、この場をお借りし、このような貴重な機会をいただきましたことを感謝申し上げます。以下、5ACUDR への参加に関してご報告いたします。

初日の26日には、研究発表会が開催されました。午前の全体セッションでは、日本と台湾の防災研究者の交流に関する経緯を含む基調講演および、能登半島地震に関する特別研究報告が行われました。午後の研究トピック別セッションでは研究発表を行い、安全確保行動を実行する鍵要因としての防災リテラシーをテーマとして、2022年3月から2024年3月までの3回のパネル調査をもとに、元々有している防災リテラシーが高いほど防災体験活動・支援活動に接触する傾向にあること、また、諸活動への接触結果としての防災リテラシーの変動は、能登半島地震のような得た知識の活用場面を想起させる直近の事象との相乗効果に影響されることを報告いたしました。質疑応答の時間では私の説明不足に関してご指摘を受け、国際学会の場では、単に英語力の問題だけでなく、日本では常識でも海外ではそうではないような理解のベースとなる枠組みも含めて明快に説明する必要があることを強く実感いたしました。セッション間の休憩中はドリンクと軽食が提供され、それらを片手に台湾側の研究者とも議論ができ、また研究発表会以外のフィールドトリップや食事といった場でも（特に食事の際はテーブルが円卓であったことも後押しとなり）、先生方や同世代の大学院生と比較的カジュアルに研究交流の場をもつことができました。

続く27日には、フィールドトリップとして921地震教育園区、車籠埔断層保存園区、集集鎮、また28日には、消防訓練センター、台中国家歌劇院を訪れました。

921地震教育園区では、1999年9月21日に発生した大地震により倒壊した中学校の校舎や隆起した断層がそのまま保存されており、地震の衝撃を生々しく伝える遺構が展示されていました。また、地震による被害の凄惨さを展示するだけでなく、「防災魔法学校」というコンセプトの下、ポップなキャラクターを使って地震のメカニズムやとっさの行動・備えについて解説したり（写真1）、その他の子供向けの防災教材や体験型展示も充実させたりと、子供たちにとって災害対策をより身近に感じられる工夫が随所に見られました。実際、展示に見入っている子供たちもおり、災害の脅威を知ることと対応行動を実行することとの結びつきを考えるうえでのヒントとなるような防災実践を学びました。



写真 1

車籠埔断層保存園区には、壁一面に車籠埔断層のトレンチ剥ぎ取り標本が展示されており、来場者が地層の断面を見ることで断層線を視覚的に把握し、921地震以前にも同じ場所で断層が発生していたことを直感的に理解できる仕掛けがなされていました。さらに、1936年（昭和11年）に

台湾総督府によって編纂された『昭和十年臺灣震災誌』も展示されていました（写真2）。この資料では、序文での「既往を追懐し将来に備ふるの資料となさんとす」との記述の通り、1935年（昭和10年）4月21日に発生した新竹・台中地震に関する詳細な記録が残されており、地震やその被害だけでなく、救護や復興に至るまでの様々な関連事項について記されていました。約90年前の資料ですが、発災後からの各種の災害対応を辿れる多くの情報が記載されており、災害対応の検証や改善点の把握を可能とする記録の重要性を再認識しました。



写真2

集集鎮では、東北大学・村尾先生のご案内のもと、まちあるきを行いました。921地震後から8年間におよぶフィールド調査のご経験から、復興を経るなかでのまちの変化等について解説していただきながら、現在の集集鎮のすがたを見て回りました。印象的だったのは、宿泊先のホテル近くにあったお食事処のご主人が今でも村尾先生のことを覚えておられて、「おかえり」と言わんばかりに歓迎されていたことです。地域に根付いた継続的なフィールド調査をしてこられたことがうかがえ、生活者の立場から地域社会の安全問題を考える研究を志向する学徒の1人として、身の引き締まる思いでした。

また、学会とは直接関係はありませんが、最後に学会期間中の私の個人的なエピソードをご紹介します。4月27日の深夜に、台湾東部・花蓮県の近海を震源とする地震が発生し、当時滞在していた台北市では震度3が観測されました。スマホにはプレジデンシャルアラートの通知が届き、地震発生と安全確保に関する情報が表示されました（写真3）。実は、学会期間中の私は大変迂闊にも台湾での通信に対応するSIMを使っておらず、またポケットWi-fiも持参していませんでした。



写真3

地震発生時はホテルで就寝していたためWi-fiにつながっていましたが、もし外出している時に発生していたとしたら、追加情報を収集することもできない状態でした。今回は深刻な被害を及ぼすような地震ではなく、また偶然Wi-fiに接続している時間だったからよかったものの、もっと強い地震が外出中に発生していたらと考えると、ゾッとする思いでした。海外の人々が日本で被災した場合の情報のバリアフリー化について思いを馳せると同時に、重要な1つの備えを怠るだけで、いとも簡単に脆弱になりうることを痛感した一夜でした。

今回、5ACUDRに参加させていただいたことを受け、地域社会の安全に関する問題を発掘・解決する研究を行いたいとの思いが一層強まりました。研究発表やフィールドトリップを通して得られた反省点・改善点および学びを活かし、今後とも研鑽を重ねていく所存です。この度は、5ACUDRへの参加にあたってご支援いただきましたこと、重ねて感謝申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

## 9. 寄稿

### オクターブとグラデーション

国土技術政策総合研究所 河川研究部水害研究室 任期付研究官  
高原 耕平

右手がピアノのオクターブを楽に捉えることに気付いたとき、かすかにさびしい感情があったように記憶している。こどもの手のひらには、親指でドの鍵盤を押さえ、小指で7つ隣の高いドの鍵盤を押さえるのは難しい。小指の付け根の、薬指側の皮がみちみちと引っ張られ、親指の付け根も力む。そうして手をいっばいに広げて、1オクターブ先の鍵盤のかどっこに小指が触れるか触れないか。「オクターブ」とは長らくその引っ張り力みの感覚だった。ところがあるとき、十分に成長した右手はドとド、レとレの鍵盤を親指と小指で正確に捉え、手のかたちをそのまま保って手首をストンと落とすとオクターブの音を出す。そのとき感じたのは達成感や力の充溢の感覚というよりは、ひとつの世界から別の世界へ自分は確かに移行してしまったという確信だった。過去の世界に再参入することは不可能だと理解した。以前の世界では、わたしは制御できないものに取り囲まれていた。あらゆるものが背伸びの先によく視界に入っていた世界が、急速に「わたしの幼少期」として圧縮され、手足の周囲はどれも自分が制御しうるもの・操作法をこれから学ばなければならないものになった。この不可逆の移行は既にほぼ完成していて、かつての世界より小さくなった鍵盤はわたしによくそれを告げる役割を引き受けたのだった。

楽器とは制御された身体動作を音に変換する道具である。ピアノだけでなく多くの管楽器・弦楽器では両手の運指がまず音程と音色を規定する。加えて、手のひらや手首、腕全体、そして足や身体全体の動きや姿勢や力の入れ方抜き方、そして息を吹き込む楽器については呼吸器から唇までの動きもそこに投入される。凹面鏡を反射した光線が一点に集まるように、演奏者の身体全体の動きが楽器を焦点にして集中する。その集中はある種の有機的な統合である。指はこう動かして、腕と脚はこう、そして呼吸はこう、と分割してプログラミングし、それを同時並行に実行すれば良いというものではないだろう。指が弾くと同時に腕と肩が弾き、唇が吹き込むと同時に肺や横隔膜が管楽器の開口部に意識を集中させるということが起きているのではないか。

演奏の身体動作の起点となるのは楽譜であり、さらには演奏者の心的なイメージである。とさしあたり解釈しそうになる。即興演奏の熟達者でないかぎり、一般にはまず楽譜があり、それを読み取りつつ楽曲そのもののイメージを形成し、その譜面とイメージが身体動作に変換され、それがさらに音に変換される。このような順序と因果関係が演奏という行為には想定される。しかし観客として居合わせている場面を思い起こすと、こうした順



序・因果関係で解釈できるだろうかとの疑問も浮かぶ。というのも、そうした場面の体験では演奏そのものがまず有り、熟達の演奏者の身体動作はそこに「従属」している。なるほど確かに演奏に向かう演奏者の意識があり、楽器を焦点とした身体動作があり、その入力に従って楽器が弦を震わせ管の空気の流れを形成する。しかし演奏そのものの場に居合わせているとき、音は演奏者と楽器から発せられつつも、運指などの身体動作はその演奏の場所それ自体の原因ではない。演奏者の運指と魂は、演奏そのもの・音楽そのものを招来しつつ、それに命ぜられて動いている。風が吹くから木が揺れるのではなく、木が揺れるのと同時に風が吹いているのに似ている。聴衆は鼓膜と聴覚神経でそれを受け取るが、それはただ音波を変換して脳内で音を再生するだけではない。演奏者と同じく聴衆は演奏の場面に従属しており、音楽の招来に参加している。聴衆の身体は音楽を介して演奏者の運指をなぞり、みちびく。聞いている側の意識は、あたかも演奏者に先立って旋律を半拍先取りするかのようにその展開をみずからたどってゆく。物理現象としての因果関係について言えばそれは聴衆の錯覚である。しかし体験としては聴衆は演奏に能動的に参加しているのであり、そして演奏者もまた聴衆が用意するこの時間意識に自らの運指を載せてゆく。

もっとも、日常環境下の音声体験はこうした陶酔的なものばかりではない。そこではよくわからない騒音とだいたい判別がつく騒音が入り混じり、遠近のひとの声や機械から発せられる音声や、自分自身が立てる音が挟み込まれる。「環境音」という便利な単語があるが、日常環境の音声体験は必ずしも環境音とそれ以外の有意味な音とにくっきり分けられるものでもない。意識の焦点に急に現れてくる音と背景に退く音、その選り分けを常に続けているのだが、その選り分けは自分の意識が常に随意にできるわけではなく、聞きたい音声と聞こえてしまっている音声の混合体のなかで意識が意味を仕分けしている。聞く／聞いている／聞こえる／聞こえている／聞き耳を立てる／聞き逃す……といったことばをわたしたちは自然と使い分けることができる。それは、わたしたちが環境から音の本質的な意味を仕分けし続けており、その仕分けの仕方にいくつもの種類があることを示している。意味と環境は別々でありながら分かちことができず、人間の意識と身体はそこに強力に介入しながら決して自由にならない。熟達の演奏を聞くことの心地よさは、意識と身体がこの仕分け作業からほぼ解放されることが主たる理由であるかもしれない。

「安全」も、こうした入り混じりと選り分けの営為に属している。音と無音、意味のある音と無意味な騒音、聞くべき声と無視してよい声を切り分けることが容易でないように、安全と危険を明確に塗り分けることはできない。ある時空間が安全でそれ以外の時空間が危険だとあらかじめ設定できるものではなく、そのつどそのつど安全という意味を選り分けてゆくことが実際のわたしたちの生活体験である。この点で、「聞く／聞いている／聞こえる……」のような微妙な表現の分け方が「安全」には無いことが残念である。「安全」という概念自体が音声のような微妙なグラデーションではなく白黒明確な切り分けを期待している。しかし生活や身体の体験においては、たとえば歩くコースを微妙に車道から遠



ざけたり、両手を塞がないように荷物の担ぎ方を変えたり、ゆるんだ靴紐を結び直すといったように、環境と身体との相互作用のなかで危険の小さいゾーンを読み取り、暫定的に確保し続けるということが主体である。完全危険ゾーンから完全安全ゾーンにまっすぐ移行するのではなく、むしろ「聞き取る」「嗅ぎ取る」「読み取る」という仕方で、自身の身体感覚と所作をベースにしてそのつど仕分けし、掬い取ってゆくものが「安全」なのだろう。

楽器とは制御された身体動作を音に変換する道具である、と先に述べた。楽器から現れる音は音色が明確で、音量そのものが大きいので、熟達の演奏は演奏の時空間を支配する。防災や防犯の努力において、こうした「楽器」に比すべきものを追い求めすぎてきたかもしれない。すなわち、それを正確に操作・運用することで明確で大量の安全を即座に確保してくれるような道具である。そのような「安全を奏でる楽器」はそうそう無いのではないか。安全とはむしろ聞き取る、嗅ぎ分けるものである。オクターブを弾けるようになったとき、わたしは全てが制御可能な世界に移行したけれども、それもまた過去の青年期の世界として遠ざかってしまった。制御不可能なものの中から制御可能なものを探し、意味の読み取れないものと読み取りうるものを簡単に分けられない世界、純粋な陶酔よりはグラデーションを保つ世界にいまいちど移行したことになる。

比喩に頼れば、ハザードマップや避難訓練や災害情報は、危険と安全が明確に塗り分けられた世界を出現させるための「楽器」ではなく、演奏やそれを聴くことに先立ってなぞっておく「楽譜」に近いかもしれない。あるいは一つのツールが、楽器のモードと楽譜のモードの両面を持つのであって、防災や安全の専門家の仕事はその両面性を引き出すことにあるのかもしれない。



地域安全学会ニューズレター  
第 128 号 2024 年 8 月

地 域 安 全 学 会 事 務 局  
〒102-0085 東京都千代田区六番町 13-7  
中島ビル 2 階  
株式会社サイエンスクラフト内  
電話・FAX : 03-3261-6199  
e-mail : [iss2008@iss.info](mailto:iss2008@iss.info)

次のニューズレター発行までの最新情報は、学会ホームページ (<http://iss.jp.net/>) をご覧ください。